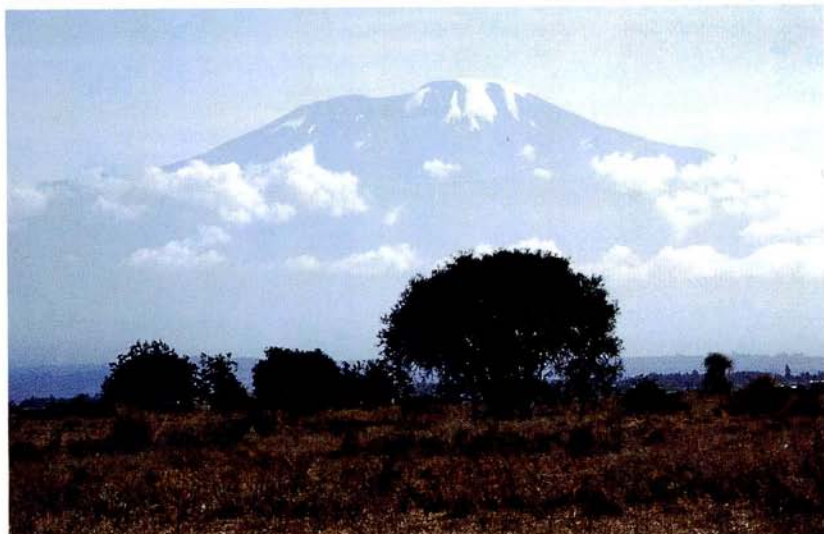


アフリカ合宿



報告書

1998年10月25日～11月4日

(調査期間)

1999年2月14日～3月17日

(合宿期間)

早稲田大学体育局ワンダーフォーゲル部



ケニア山 マッキンターズ キャンプ手前



ケニア山登頂



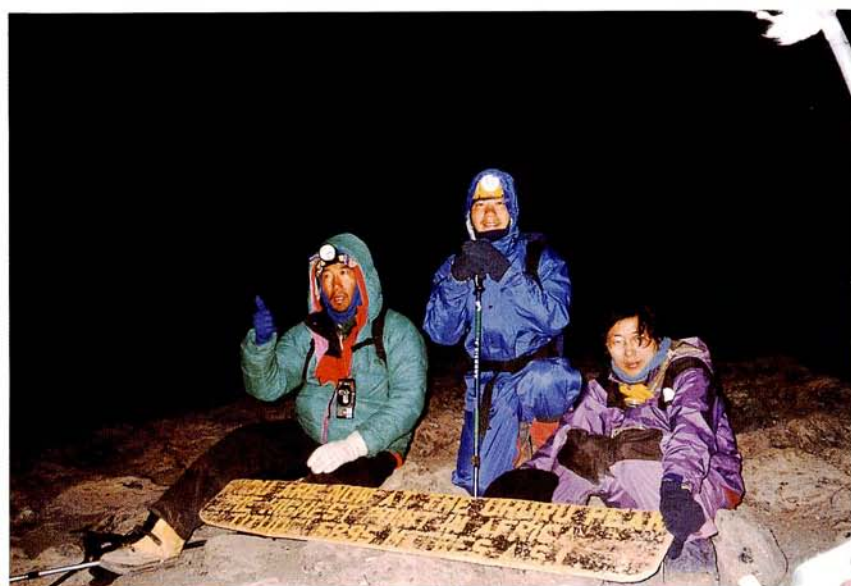
キリマンジャロをめざし、ひたすらこぐ



キリマンジャロ山 南面



赤道直下の氷河



アフリカ大陸最高峰 ウフルピーク



キリマンジャロ山頂からの日の出



ガイド、ポーターと記念撮影

アフリカ合宿報告書

早稲田大学
ワンダーフォーゲル部

アフリカ合宿報告書目次

巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

計画概要

ケニア国、タンザニア国概念図・・・・・・・・ 5

アフリカ合宿主旨・・・・・・・・・・・・・・ 10

行動記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

係報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51

装備係報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52

食糧係報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56



	医療係報告	60
	気象係報告	64
	会 計	69
	資金計画	70
	会計報告	72
	合宿総括・隊長・OBの言葉	75
	計画実現まで	93
	感想文	109
関係者及び協力して いただいた方々の紹介		119



卷
頭
言

アフリカ合宿のご報告

監督 佐藤 佳一

昨年10月より、27代三廻部OBより監督を引き継ぎ、今回の合宿に途中合流し参加させていただきました。先ずもってご協力いただきました、田島部長をはじめ多くのOBの方々、現地で大変お世話になりました仲又さん、この合宿をサポートしてくれた道祖神の皆様にお礼申し上げます。おかげさまで所期の目的をほぼ達成し、全員無事帰国することができました。このような活動はOB会のバックアップなしには、成し得ません。

又、私が途中からの参加のため、隊長として37代の中村圭司君が1ヶ月以上仕事を休んで全行程同行してくれたことに感謝しています。

この合宿で最大の収穫は、自分たちの納得できる合宿を行うことができ、現役が自信をつけたことです。彼らなりに一生懸命やった結果だと思えます。海外合宿は様々な点で困難を伴いますが、それだけ得るものも多く今回の経験が今後の人生の糧となるはずです。是非今後も趣向をこらし、学生でなければできない、学生だから許される活動を実施してもらいたいと思っています。

今春新人が12名入部してくれたのも、彼らの自信に満ちた勧誘態度が功を奏した点を見逃せません。部員の数が少ないと、上下関係と役割分担が曖昧になり、どうしても馴れ合い的になってしまいます。今回のアフリカ合宿に参加しその点が気になりましたが、やむを得ない点でもあり、部員を増やさないとうとうもありません。やはり人数がいないと本来の活動ができないので、新人を大切に育て、部を盛り上げていきたいと考えています。

個人的には久しぶりの本格的な山行できつかったです。現役との距離が縮まり貴重な経験をさせていただきました。このような機会を与えていただき感謝しています。有り難うございました。



壮行会



佐藤監督

アフリカ合宿を終えて

50代 主将 長友 慎治

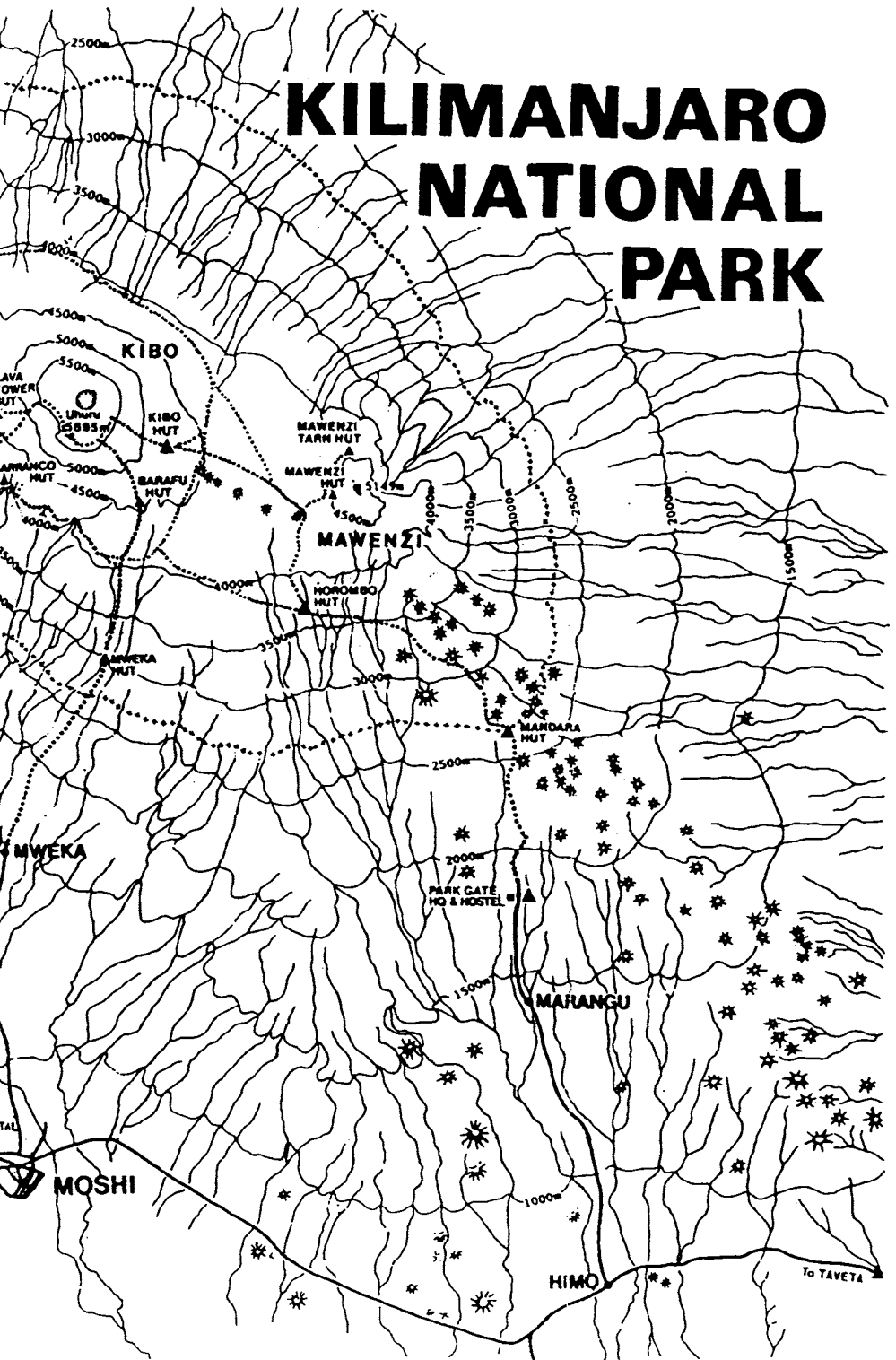
私達が二年生で代を執った時から取り組んできたアフリカ合宿が無事終了し、全員元気で帰国できました。そして今回に限らず、現役のいかなる活動もOB・OGの方々のご指導、ご支援のおかげで、私達が無事故でいい活動を行えることをこの場をお借りして感謝いたします。

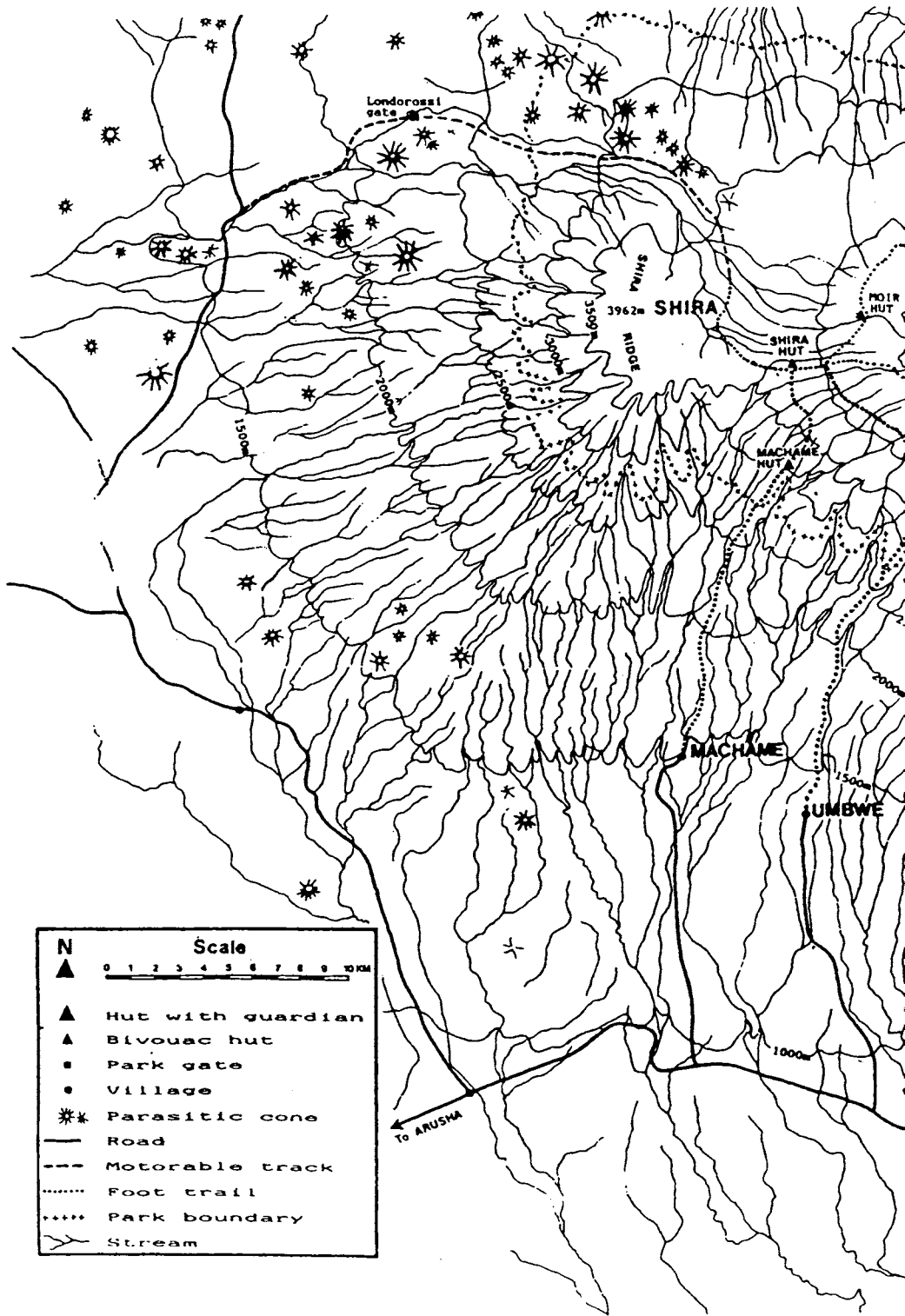
今回のアフリカ合宿で私達は本当に様々なことを学びました。アフリカで見て体感してきたことは私達の一生の財産になることは間違いなく、いい活動ができたと思っています。しかし、それと同じくらい、もしくはそれ以上に学んだことは「早稲田大学ワンダーフォーゲル部」についてはなかつたでしょうか。50代として海外合宿を行った意義とは、ワンダーフォーゲル活動と海外合宿とは、早稲田ワンゲルの魅力とは、50年の歴史の中で自分たちとは・・・。本当に今回の合宿を企画し実行した過程には、いろいろと考えさせられる命題がありました。今もなおこれらの命題とがっぶり四つになって取り組んでいるのですが、そもそもは今回のアフリカ合宿を行ったことによりこれらの命題と向き合えるようになったと言えます。

アフリカ合宿を終えた四月には12名の新人を迎えました。部員減少に悩み、ここ数年の課題となっていた新人勧誘においてこのような成果を収めたことは、今回行いましたアフリカ合宿がいかなるものであったかを一番よく現しているのではないのでしょうか。そういう意味では、50代は最高の形で次代へ引き継ぐことができたと思っています。

計
画
概
要

KILIMANJARO NATIONAL PARK





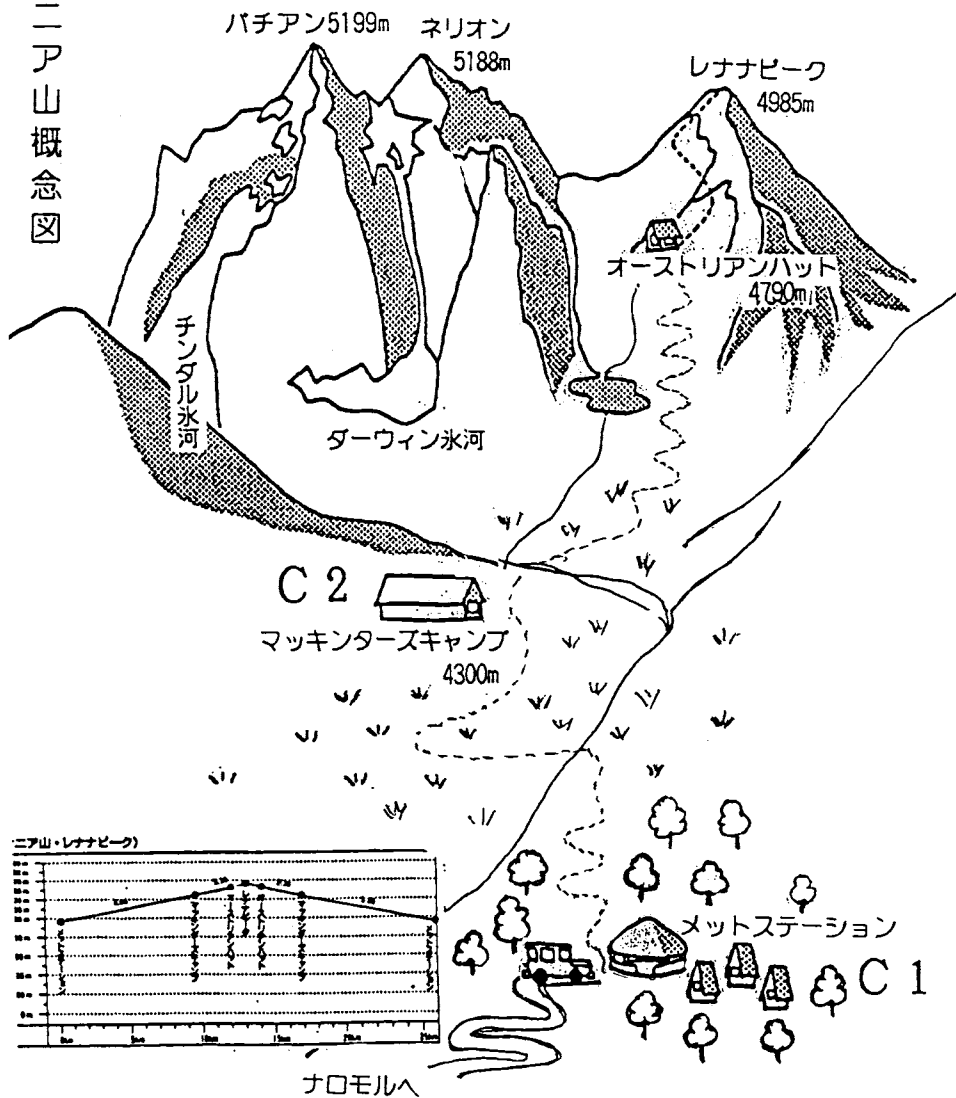
N

Scale

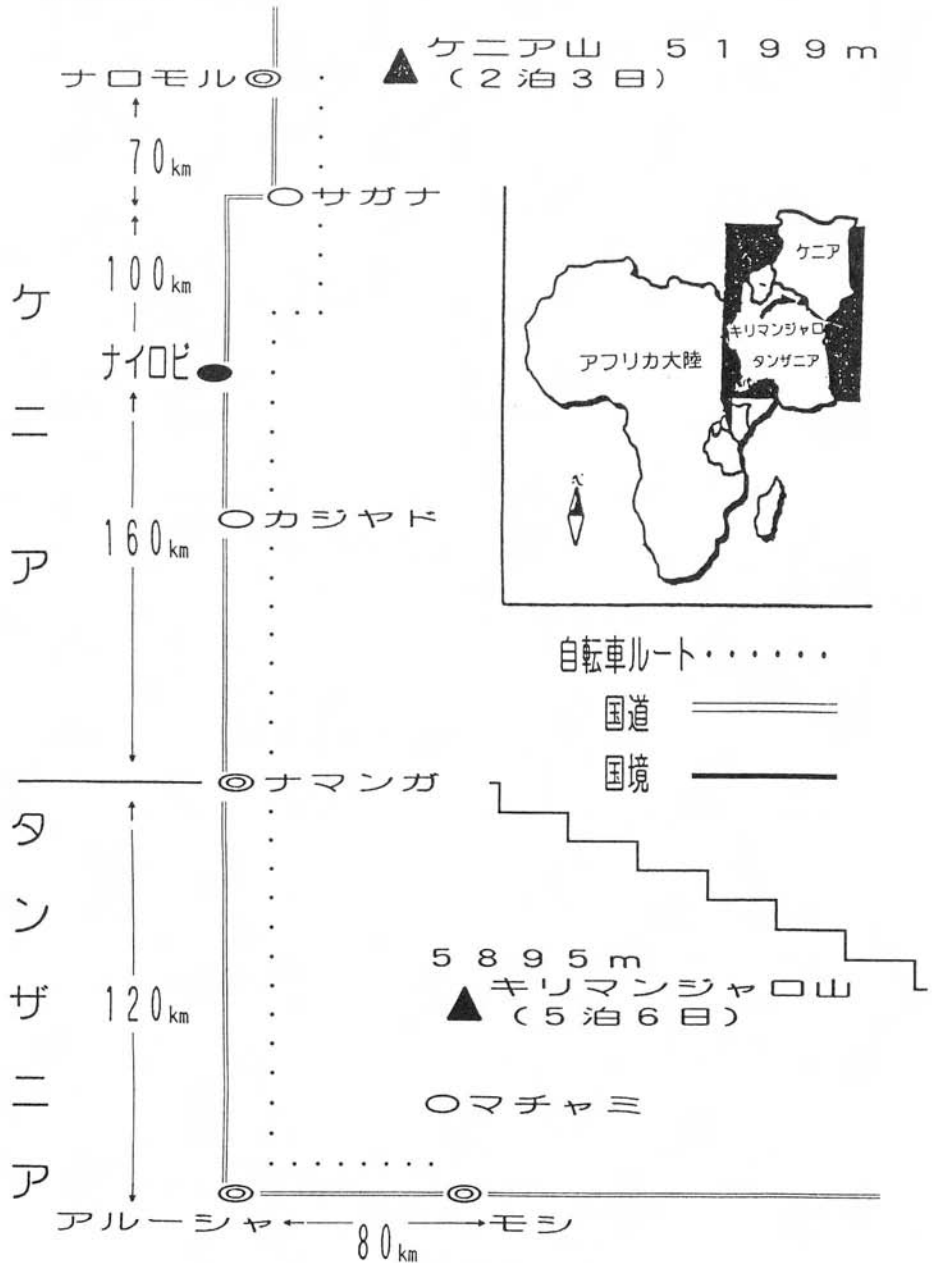
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 KM

- ▲ Hut with guardian
- ▲ Bivouac hut
- Park gate
- Village
- * Parasitic cone
- Road
- - - Motorable track
- Foot trail
- Park boundary
- ~ Stream

ケニア山概念図



概念図



Ⅱアフリカ合宿主旨Ⅱ

我々50代は新人の頃から海外で活動を行っていたという気持ちを抱いていた。そしてその思いはワングル活動を行うほどに増し、「日本では味わえない自然を味わいたい」と強く思うようになっていった。

我々が代を執り活動方針を決めるにあたり一番行いたいことは海外合宿であった。また我々は二年生で代を執ることになったので2代分の期間を指揮できる。そのことを考えても、海外へ向けての活動とその後国内活動を充実させる活動の二本柱の方針を立てることにした。

海外合宿後の活動を見越し二年間代を執る上で、今の我々が海外合宿を行う意義は大きい。海外という一つの大きな目標に向けて全部員で一丸となり活動することで部内の士気を高めた。そしてその勢いに乗り次代への確かな基盤を築きたいのである。海外合宿という極めて困難な道を選ぶことで、部員全員の実力養成、結束を求める。海外合宿までの一つ一つの合宿で

成果を挙げ、日々のトレーニングからデスクワークまで全ての面において努力を要求し、部員がそれに真剣に取り組んでいくことによる力の充実。海外合宿を行えるまでの相応の実力を養うことで部のこれからの飛躍を願う。

日本にはない自然、未知なるフィールドを探していくうちにアフリカの広大な大地に憧れた。サバンナの野性動物をこの目で見てみたい。地平線に沈む大きく、真っ赤な夕日に向かって走りたい。アフリカの大地を全身でもって拔渉したい。そう考えていくうちに我々の思いは少しずつ形を持ちはじめ、現実味を帯びていく。そして出来上がった計画がキリマンジャロ山、ケニア山を登りその間をMTBでつなぐというものであった。

我々が登るアフリカ最高峰のキリマンジャロ山の標高は5895m。そしてケニアの峻峰ケニア山は5199m。いずれにしても国内では体験しえない高さである。そしてケニア山か

らキリマンジャロ山へ向けてMTBでアフリカの大地を駆け抜ける。ここではアフリカの自然と人々、そして動物たちの調和のとれた営みを肌で感じ取り未だ人類の原点が凝縮されたこの地域の生活に溶け込みたい。

六千メートルという高さからはいったい何が見えるのだろうか。我々と共に駆け抜けていくサバンナの風は何を語りかけてくれるのだろうか。アフリカの大地が我々に見せてくれるの、それを全身で受け止めそれにこたえられるほどの大きな情熱を持って日本を立とう。きっと想像をはるかに上回る自然が我々を迎えてくれるだろう。



隊員構成

隊長	中村 圭司 (37代)	
三年	長友 慎治 (L、記録)	法学部
	徐 宗聖 (SL、医療)	第一文学部
	藤田 亮助 (会計、食糧)	政治経済学部
	浅井 瑞穂 (装備、気象)	教育学部
二年	中島 一彦 (装備)	政治経済学部
一年	栃谷 佳宏	第一文学部

※3月2日より佐藤監督も同行

行 動 予 定 表

日 付	行 動 内 容	距離・備考	宿泊場所
2/14日	東京発12:00 ~ ムンバイ着(インド) 20:55	12H25	AI301
15月	ムンバイ発10:20 ~ ナイロビ着13:50	6H	仲又邸
16火	出発準備(食料、装備等の調達・ナイロビにて)	出発準備	"
17水	同上	"	"
18木	ナイロビ=ナロモル~メットステーションC1	4H	ケニア山
19金	C1~マッキンターズキャンプC2	6H	登山
20土	C2~ウフルピーク~メットステーション~ナロモル	10H	リバーロッジ
21日	ナロモル停滞	停滞日	"
22月	ナロモル ~ サガナ	70キロ	カビンディ邸
23火	サガナ ~ ナイロビ	100キロ	仲又邸
24水	ナイロビ停滞	停滞日	"
25木	ナイロビ ~ カジヤドから50km地点	120キロ	ブルースアイH
26金	カジヤド ~ ナマンガ	40キロ	リバーホテル
27土	ナマンガ ~ アルーシャ	120キロ	マサイ・キャンプ
28日	アルーシャ ~ モシ	80キロ	ハニーバーガーロッジ
3/1月	モシ停滞	停滞日	"
2火	"	停滞日	"
3水	モシ=マチャミゲート~マチャミハットC1	6H	キリマンジャロ登山
4木	C1 ~ シラハットC2	5H	
5金	C2 ~ バランコハットC3	6H	
6土	C3 ~ バラフハットC4	6H	
7日	C4 ~ ウフルピーク ~ ムエカハットC5	15H	
8月	C5 ~ 下山 = アルーシャ	5H	マサイ・キャンプ
9火	アルーシャ = ナマンガ = ナイロビ	車で移動	仲又邸
10水	予備日		
11木	予備日		
12金	予備日		
13土	予備日		
14日	予備日		
15月	ナイロビ発20:00 ~		
16火	ムンバイ着4:20、発15:40	5H50	AI200
17水	東京着8:00	12H50	AI302

全体緊急時準則

一、隊員死亡時

- (1) 本隊から日本大使館、在日本部に連絡する。
在日本部は隊員家族に連絡する。
在日本部、監督、常任理事会を通じて大学、関連諸機関に連絡する。
在日本部は在日対策本部を設置する。
在日対策本部は対アフリカ対策本部を設置し要員を派遣する。
隊は行動を中止し日本大使館及び隊長の指示に従う。

二、隊員疾病時

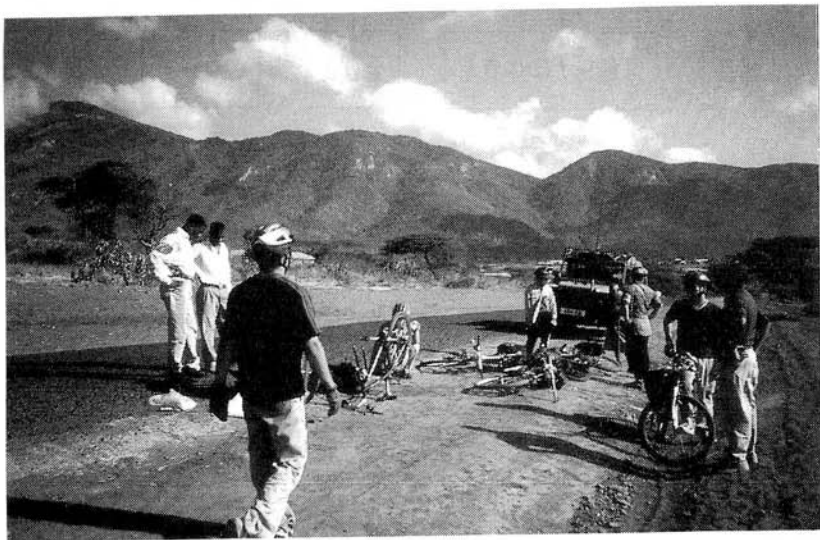
- (1) A. 生死に関わる場合
本隊から日本大使館、在日本部に連絡する。
在日本部は隊員家族に連絡する。
在日本部は在日対策本部を設置する。
在日対策本部は要員を派遣し隊員家族は要員に同行する。
隊は行動を中止し隊長の指示に従いナイロビに待機する。
- (2) B. 生死に関わらない場合（入院、処置不可能等）
ナイロビに移送する。
本隊から在日本部に連絡する。
在日本部は隊員家族に連絡する。
在日本部は在日対策本部を設置する。
疾病隊員の安全を確保した後隊は行動を続行する。

* 緊急時の疾病者の移送は全てフライングドクターによるセスナで行う

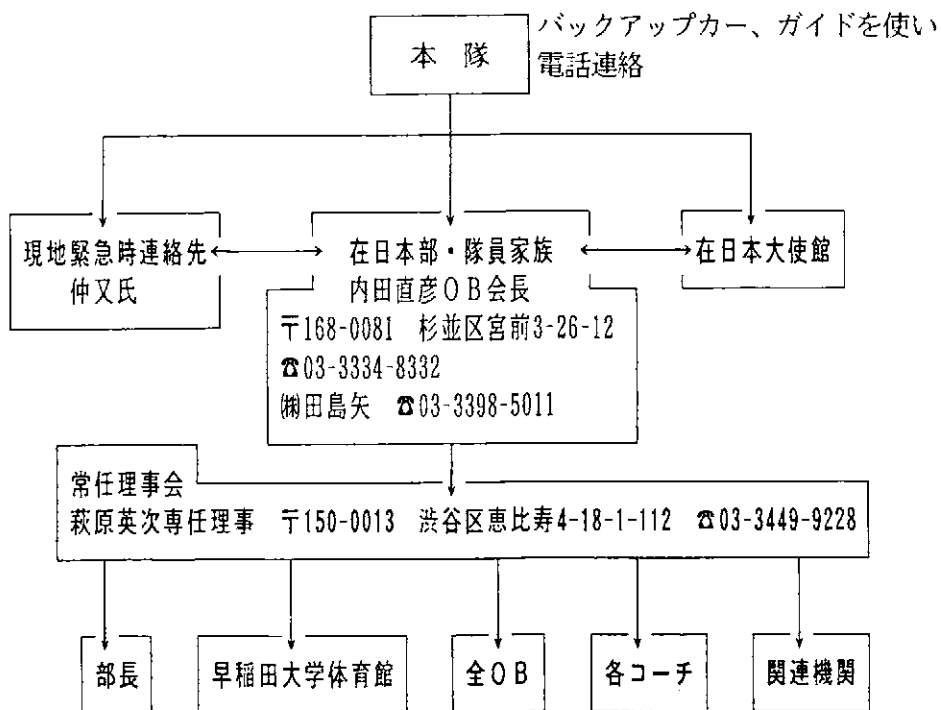
THE FLYING DOCTORS' SOCIETY
OF AFRIKA-Kenya, Tanzania.
P. O. Box 30125 NAIROBI KENYA
TLX: 23254 AMREF.
FAX: 506112

行動準則

- 一、登山ラウンドは、現地ガイドの指示の下行動する。
- 二、MTBラウンドでは、バックアップカーを必ず伴走させる。
- 三、無線は隊長とリーダー、現地ガイドチーフの3人が持つ。
- 四、隊員が高山病等で本隊と別れて下山する場合、ガイド又はポーターを必ず伴い宿泊場所まで同行してもらう。
- 五、自転車ラウンドは午後4時までに次の幕場に着けないと判断した時点で、車で移動することにする。



連絡網 (ケニア、タンザニア～東京)



*緊急時はエージェント道祖神の全面的な協力を得ることになる。

●道祖神；ケニア・ナイロビ事務所

Nairobi, K E N Y A :
4 F, Standard Bldg.
Wabera Street,
Nairobi,
Postal Address ;
P. O. Box. 41666, Nairobi, Kenya
☎ :001-(254)2-22-8855/22-1581
TLX:001-(987)25464 DODO K
FAX:001-(254)2-21-3291

●現地緊急時連絡先；仲又氏

自宅； P. O. Box. 40101, Nairobi, Kenya
☎ :001-254-150-22552
会社： E. A. O S A K A C E M E N T C O .
TEL:001-254-150-20203
FAX:001-254-150-20406

●在ケニア日本大使館；Embassy of Japan

Kenyatta Ave., P. O. Box. 60202
☎ :001-254-2-332955
FAX:001-254-2-216530

●在タンザニア日本大使館；Embassy of Japan

Plot No.1018 Upanga, Dar Es Salaam
☎ :001-255-51-115827 or 115729
FAX:001-255-51-115830

保 険

アフリカ合宿では、A I U 保険会社の海外旅行保険01タイプを四六日間契約する。

担 保 事 項		限度額 (万円)	保険料 (円)
傷	1 死亡・後遺障害	1,000	45泊46日まで 13,880
	害	2 治療費用	
疾	3 治療費用	600	
病	4 死 亡	1,000	
5 賠償責任 (自己負担額無)		5,000	
6 救 援 者 費 用		500	
7 携行品 (自己負担額3000円)		40	

一、保険金が支払われる場合

- 1 (1) 海外旅行行程中の事故によるケガが原因で事故の日からその日を含めて一八〇日以内に死亡したとき。
(2) 海外旅行行程中の事故によるケガが原因事故の日からその日を含めて一八〇日以内に身体に後遺障害が生じたとき。
- 2 海外旅行行程中の事故によるケガが原因で、医師の治療を受けたとき。
- 3 (1) 「旅行行程中に発病した病気」または、「旅行行程終了後48時間以内に発病した病気」により旅行行程終了後48時間以内に医師の治療を開始したとき。
(2) 海外旅行行程中に感染した伝染病(コレラ、ペスト、天然痘、発疹チフス、ラッサ熱、マラリア、回帰熱、黄熱をいう)により旅行行程終了後14日以内に医師の治療を開始したとき。
- 4 (1) 海外旅行行程中に病気により死亡したとき。

- (2) 「旅行行程中に発病した病氣」または旅行行程終了後48時間以内に発病した病氣により、旅行行程終了後30日以内に死亡したとき。
- (3) 海外旅行行程中に感染した伝染病（上記治療費用の場合に同じ）により旅行行程終了後30日以内に死亡したとき。
- 海外旅行行程中にあやまって他人にケガをさせたり、他人のものをこわしたりして損害をあたえ、法律上の賠償責任を負ったとき。

- (1) 海外旅行行程中の事故によるケガが原因で事故の日からその日を含めて一八〇日以内に死亡したとき。
- ・海外旅行行程中に発病した病氣が原因で旅行行程終了後その日を含めて30日以内に死亡したとき。
- (2) 海外旅行行程中の事故によるケガまたは海外旅行行程中に発病した病氣が原因で継続して7日以上入院したとき。
- (3) 海外旅行行程中に搭乗中の航空機もしくは船舶が行方不明もしくは遭難した場合被保険者の生死が確認できないときまたは捜索、救助活動が必要なとき。

海外旅行行程中に携行品（カメラ、宝石、衣類、航空券、旅券など）が盗難、破損、火災などの偶然的事故にあつて損害を受けたとき。

（注意）携行品は、被保険者が所有かつ携行する身の回り品をいうが、現金、小切手、クレジットカード、運転免許証、コンタクトレンズ、定期券、現金自動支払機用カード、各種書類等は含まない。

二、緊急時の支払い

緊急時に多額の費用（手術など）が必要な場合、AIUのパリセンター（24時間日本語受付）に連絡し、事情を説明。上記エージェントが関係先へ支払いを保証する。

AIUアシスタンスサービス（年中無休・

コレクトコール）

パリセンター

☎：（331）49-10-91

装 備 計 画

《個人装備表》	数量		数量
アタックザック	1	コンパス	1
ザックカバー	1	パスポート	1
登山靴	1	学生証+国際学生証	各1
シュラフ+シュラフカバー	各1	時計	1
五本手・インナー手	各1	筆記用具	1
目出帽	1	計画書	1
靴下+ニッカホース	各2	現金	適量
カッターシャツ	2	洗面道具	1
防寒着	1	防虫ネット	1
帽子	1	ゴミ袋	適量
スパッツ	1	ストック	2
化繊Tシャツ	2		
雨具	1	(自転車関連)	
個人医箱	1	マウンテンバイク	1
非常食	1	キャリア	1
カラビナ	2	サイドバック	2
細引(5m)	1	鍵	1
ポリタン	1	笛	1
丸食	2	荷紐	1
軍手	2	替チューブ	1
スプーン	1	輪行用品	
ライター	2	靴	
トイレットペーパー	適量	ネジ	
ナイフ	1	ウール下着	
ヘッドランプ	1	日焼け止め	
替電池(リチウム)	12	リップクリーム	
サングラス	1	自転車用ヘルメット	1
エスビットメタ	1	用心棒	2
地図+コピー	1	パンク修理キット	
マップケース	1		
ズボン	2	(自由品)	
サブザック	1	サンダル	
		ボトル	
		ウレタンマット	
		英語辞書	

総重量 約30kg

《団体装備表》

● <u>デポ品</u> (調査時仲又さん宅に預けたもの)	数量
ダンロップ	1
ビニルーシート	5
ペグ	20
コッヘル	2
ローソク	2
蚊取線香	適量
● <u>現地調達品</u>	
ガスカートリッジ	2
七輪	1
炭	適量
● <u>持参品</u>	
エスパース	1
ガラクタ	1
2点	1
医箱	1
ポロライドカメラ	1
カメラ	1
フィルム	70
無線	3
チューブメタ	2
オレノコ	1
ゴミ袋	適量
細引 (10m)	3
タイヤ (26インチ)	1
サイクルメーター	1
銀マット	5
エンピ	1
修理工具	
自転車修理工具	
* ガラクタ オタマ、しゃもじ、包丁
* 2点 炎布、EPI板
* 修理工具 ドライバー、ラジオペンチ、ボンド、ソーイング オールガムテープ、リペアテープ、リペアパイプ、 針糸ボタン、ポリタンパッキン、ポリタン替蓋、 替コンパス、針金替靴紐、リチウム電池2本
* 自転車修理工具 空気入れ、モンキーレンチ、スパナ×2、コック レス抜きタイヤ、コネクティブピン、チェーン、 ネジ、チェーン切り潤滑油、六角レンチ

医療計画

《内服薬》

		数量
感冒薬	パブロン	60
胃腸薬	サクロン	60
下痢止め	征露丸	1
	ロペミン	50
鎮痛剤	バファリン	30
強心剤	救心	10
抗生物質	ユナシリン	12
	ケフラール	12
利尿剤	ダイヤモックス	100

《外傷薬》

消毒剤	オキシドール	2 (予備1)
止血剤	無臭ホルム酸	2 (予備1)
化膿止め	クロロマイセチン	2 (予備1)
消炎鎮痛剤	インドメタシン	2 (予備1)
	冷しっぶ	10 (予備5)

《器具》

ハサミ	1	滅菌ガーゼ	8
爪きり	1	アンダーラップ	1
体温計(電子)	1	油紙	3
テーピング(大)	1	カットバン	3
脱脂綿(50グラム)	1	サポーター	膝用1
とげ抜き	1		足首用1
伝令書	1	包帯	4裂1
			6裂1

《個人医薬品》

持病薬

テーピングテープ（38ミリ） 1

虫除け・虫刺され

マスク

バンドエイド

三角布

各種ビタミン剤

日焼け止め

《イエローカード》

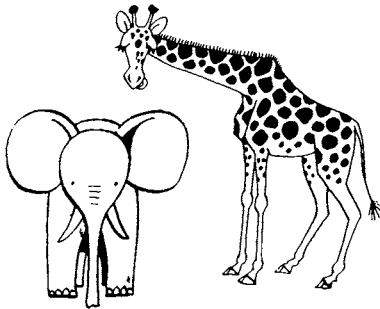
抗マラリア薬（メファキン）

《自由品》

酔い止め

*抗マラリア薬は2月16日の買い出しの際購入。

*予備の薬品はナイロビにデポする。



食料計画

	夕食	T. P.	朝食
食事モデル	米 カレー等の汁物 お茶	菓子又は フルーツ 紅茶	米 スープ類 お茶

- ・上記のモデルを基に食事を作る。汁物、菓子等は現地で購入。
- ・野菜は全て現地購入。
- ・肉は牛、鶏が入手可能。
- ・食材は生で使用しない。必ず加熱する。

《行動食》	1日の量	ビスケット チョコレート 飴	2人で1箱 2人で1枚 1人 5個
-------	------	----------------------	-------------------------

《病人食》	お茶漬けの素 ポカリスエット レトルトお粥 梅干し 餅	1人前×10 10包 1人前×5 適量 30個
-------	---	-------------------------------------

《調味料》	醤油 にんにくチューブ ふりかけ	500ml 3 3種×3	塩 500g 砂糖 2kg
-------	------------------------	--------------------	------------------

《食事内容量》

夕食	T. P.	朝食
米 1.5合×7人 肉 50g×7人 人参2、ジャガイモ2、 玉葱2、ルー等7人分	菓子又は フルーツ適量 紅茶7人分	米 1合×7 スープ類 7人分 人参2、ジャガイモ2、 玉葱2

《日本から持参する物》

お茶漬けの素	1人前×10	麦茶	30袋
ポカリスエット	10包	紅茶	40袋
レトルトお粥	1人前×5	日本茶	10袋
梅干し	適量		
餅	30個		
醤油	500ml	塩	500g
にんにくチューブ	3	砂糖	2kg
ふりかけ	3種×3		

行 動 記 録

行動記録

二月一三日 「出発前夜」

16時部屋集合。各自荷物を携えて甘泉寮へ移動する。隊長の中村OBも合流し、女子美ワングル差し入れのチョコレートを皆でかじる。そう言えば、明日はまさにバレンタインデー。手作りチョコなど生まれてこの方もらったことのない男子部員一同大いに感激。藤田は食べるのが惜しいのか、そっとポケットに忍ばせる。18時過ぎになり初代安田OBが激励に来訪。「これでうまい物でも食べて精をつけなさい。」とご祝儀をいただいたので景気付けに寿司を食べに行く。いよいよ明日出発で緊張のあまり眠れないかと思いきや、これまでの準備の疲れか、皆一瞬のうちに爆睡。頼もしい(図太い?) 奴等だ。

二月一四日 「13時間空の旅」

6時起床後、東京駅成田エクスプレス乗車ホームへ移動する。OB会長の内田さんをはじめ、大勢のOBの方々が見送りに来て下さった。成田空港に行



東京駅出発前

くともここでも大勢の見送りがあり感激する。荷物の超過料金を心配したが、危惧したよりは安くすんだ。お決まりの光景だが、ハイジャック防止の金属探知器に柵谷がつかまっている。しかもなかなか開放されない。一体何を身につけてきたのだろうか。12時になり定刻通りテイクオフ。インドのムンバイ空港まで約13時間に及ぶ空の旅の始まりである。さっそく機内サービスが始まり、フライトアテンダントとの英会話が始まる。皆心なし緊張して英語がぎこちない。特に徐はコーラ一つもらうのに苦勞している。この先それで大丈夫：？途中ヒマラヤ山脈を窓越しに見て、後はひたすら「機内食を食べて寝る」を繰り返す。まるで人間プロイラー状態。インドに着くまで3回の機内食を食べた。ムンバイ空港に着いてホテルまでのシャトルバスを待つがなかなか来ない。時刻表はあるがまるで意味がない。時々別のホテルのバスが20\$で乗せていってやると言うが無視する。待つこと2時間弱やっとな我々の宿泊先のシャトルバスが来た。遅れたくせにちゃっかりチップをねだってくるあたりの感覚にはついていけない。



機内でくつろぐ隊員たち

ホテルに着いてから明日の打ち合わせを行い、強盗などのトラブルに関する注意を促して就寝。ずっと座りっぱなしだったので精神的に疲れる一日だった。

二月十五日 「ナイロビ到着」

昨夜寝たのが午前2時で6時に起床。ほとんど寝てない。7時のバスで再びムンバイ空港へ。空港で朝食を摂る。ファーストフードのような店でカレーを食べるとこれが非常に美味い。やはり本場のカレーは違うもんだと一同妙に感心する。朝食後機内に乗り込み離陸を待つがなかなか動こうとしない。機内で待つこと1時間、ようやくアナウンスが入った。どうやら今の今迄管制塔職員がストライキを行っていたとのこと。とにかく早くアフリカに連れていってくれと思うが、気を揉んでもどうしようもないので眠ることにした。

2時間程遅れてようやくナイロビ空港に到着。空港には今合宿の全てでのご協力いただいた旅行会社道祖神 (Do Do World) のスタッフと仲又さんが出



ナイロビ市街

迎えてくれた。日本から持参したマウンテンバイクと大きな荷物を車に積み込み、仲又さん宅があるアチ・リバー（ナイロビからモンバサ方面へ20 km 程南下したところ、この仲又邸をケニア滞在の拠点とさせていただいた）へ向かう。10月に調査に訪れた時よりも暑く、ジャカラントの花も終わっていたが、ついにアフリカに下り立ちこれから一ヶ月の滞在に胸を膨らます。

二月一六、一七日 「現地買い出し」

ナイロビ到着後2日間は買い出しや準備のためアチ・リバーに停滞する。暑さと慣れない土地のため、街に出るだけで非常に疲れ、本番の行動が少々不安になる。しかしこちらで購入した七輪でスペアリブを焼いて食べていたらそんなことは忘れてしまった。アフリカで食べる肉はどうしてこんなに美味しく感じるのだろうか。いや、実際に美味しいのだから、何か別な理由があるように思う。それはあたくも自分が狩猟したような雰囲気を持たせてくれる土地柄かなと一人考えながら骨をしゃぶった。



ケニア山入山ゲート

二月一八日 「ケニア山登山開始」

いよいよ行動開始。ナロモルまでは車で約2時間程北上する。ナロモルリバーロッジで昼食後、受付で登山手続きを済ませる。今回が初めての海外登山ということで遭難対策上の安全を考え、登山に集中するためにガイド、ポーターを雇った。コックもついでくるので山でのご飯も楽しみ。

ケニア山(4985m)は神の山。現地の人はこちらからパワーをもらおうと言われている。険しさと堂々とした山容においてはアフリカ第一の山だ。初日の行程は3050mにあるメットステーションまでの約四時間。林道のような広い道をゆっくりゆくり登っていく。高山病にかかるのを防ぐには、多くの水分を摂取して体内の老廃物を体の外に出すことと、ゆっくり歩いて徐々に高度順化することが求められる。だからキーワードは『ポレポレ』。ガイド、ポーターと目が合う度に「ポレポレ」と言い合っているが登る。

公園ゲートから登山道に入ると、何やら大きな糞がやたらと目につく。てっきり牛の糞だと思ってい



高度4000m付近にて1本

たが、ガイドに教えられてびっくり！それはなんと象の糞だった。夜になるとこの辺りでは象が出没するらしい。普通日本の山を歩いて出会える動物といえば鹿、雷鳥ぐらいである。まさか象が身近に生活しているなんて思いもなかった。他にもバッファローなどが生息しているということで、あらためてここはアフリカなのだと思ひ知る。

今日のディナーは鶏肉とジャガイモを煮て味付けをした肉じゃがのようなもの。給仕から、後片づけまで全てポーターがやってくれる。普段の合宿では全部自分たちで行っていることを、今回はポーターがやってくれるのだ。学生である私たちにとっては少し贅沢過ぎる気もする。しかし、ガイド・ポーターを雇うのは義務なので今回は存分に楽しむことにした。(注)ポレポレ：スワヒリ語で「ゆっくり」という意味。

二月一九日 「出た！高度障害」

二日目は4300mのマッキンターズキャンプまで約六時間の行程。さすがに4000mを超えると高度障害が出てくる。頭痛、吐き気から食欲がなくな

なり気力で歩く。マッキンターズキャンプは石でできたしっかりとした小屋。小屋の周りで多くのハイラックスが遊んでいた。次の日は午前1時に起床し、2時に出発の計画なので早めに寝ようとするが眠れない。最悪なコンディションでアタック当日を迎える。

二月二〇日 「ケニア山登頂」

真っ暗な中、ヘッドランプを点けて黙々と歩く。周りの景色など分かるはずがなく、ただ月だけが私たちの頭上を照らしている。しばらく歩くと中島が遅れはじめる。皆のペースについていけないようだ。隊を二分してゆっくり登らせるが、今度は倒れ込むようにして休むようになる。かなり弱っている。4800mのオーストラリアンハットに本隊と40分後れで到着した。ここから先は道が険しいので、歩行が安定しない中島と私は小屋に残ることにした。私たちを除いた他のメンバーはアタックを続け、一時間半後に小屋まで帰ってきた。「山頂はどうだった」と浅井に聞くと、「すごく日の出がきれい

だったよ」と答える。「くそっ、俺も行きたかった」と中島はしきりに悔しがっていた。栃谷は今日が誕生日で山頂で祝ってきたらしい。晴天の中、山頂からの素晴らしい景色は人生で最高のバースデープレゼントとなったことだろう。

下山は早い。明るくなり周りの地形が分かるようになったので、こんな所を登っていたのかと感心しながら下る。しかし頭痛、吐き気は相変わらずおさまらない。富士山と同じぐらいの高度、3500mぐらいまで下りると幾分楽になってきた。一人のポーターと話しながら下る。「ガイド・ポーターは高山病にはならないのか？」と尋ねたところ、「慣れないうちは高度障害が出て苦しかった。今は体調が悪い時に少しなったりするぐらい」だそうだ。また40歳の彼には二人の娘と一人の息子がいるが高校に行く娘の学費を日本人が援助しているらしい。だから日本人には感謝しているし、子供たちのためにも当分は山に登り続けると話してくれた。

14時にメットステーションまで全員下山。午前2時に行動を開始したので今日は12時間行動したこと



ケニア山ピーク

になる。下山後、最後の食事をポーターたちが用意してくれた。彼らにしてもこれで仕事が終わるので皆嬉しそうだ。食事が終わり荷物を整えると、チップを渡し記念撮影をしてキャラバンは解散。初めての海外登山を終えて、隊員にも安堵の表情が見える。全員で登頂できなかったのは残念だが、ガイド、ポーターとのコミュニケーションもうまく行き楽しい登山であった。

二月二一日 「ナロモル停滞」

今日は休養日。しかしあまりの暑さに休養にならない。浅井、徐、中島は昼寝を決め込む。残りの3人はせっかくだからいろいろ周ろうとナロモルの街に繰り出す。昼食をキオスク（安食堂）で摂り、その安さと量に感激する。道行く人の視線がやや恐いのでカメラを隠して歩く。ぐるぐる歩いて周っているうちに暑さにノックアウトされ、3人はフラフラになりながら幕場に到着。幕場から見た夕日に染まるケニア山は最高に奇麗だった。

― 栃谷の日記より ― 2月20日

17時リバーロッジに到着。また食当か・・・と思いきや何とロッジのレストランを予約したという。隣にテントを張った英国人のラファイルも誘い、一同レストランへ向かう。

席について二度びっくり。何とこのディナーは僕の誕生日を祝うために長友さんがセッティングしてくれたらしい（本人はたまたまだと言っていたが）。さらにどこから出したか浅井さんが英字新聞に包んだプレゼントを手渡してくれた。中身はケニア人が見たら間違いなくキレそうな「How to be a Kenyan」という冊子と、チュッパチャップスをくわえたワニのおもちゃ。オモチャは浅井さんが、冊子は藤田さんが選んでくれたらしい。同封された紙片には「そのままのキャラで突っ走れ」「立派なケニア人になれよ」と書いてあった。食後にはケーキが。長友さんは「このために10\$のチップを出したんだぞ」と10\$をやたら強調しつつ言っていた。嬉しくて、同時に先輩方の愛をひしひしと感じた出来事だった。

19歳の誕生日にケニア山のピークを踏める人間がこの世に何人いるだろうか。日本を遠く離れたアフリカの地で、得体が知れないけど愛の詰まったプレゼントを贈られた人間が何人いたのだろうか。生涯で（まだ19年間だが）一番印象強いバースデーだった。これからも多分ずっと一番だろう。



ケニア山をバックに

二月二二日 「マタトウーは恐いよ!!」

いよいよマウンテンバイクでのツーリングの始まりである。アフリカのどこまでも続きそうな真っ直ぐな道をツーリングすることは私たちの憧れであった。事故防止のために伴走車を隊の前後に配備して走ることに加え、今日の目的地サガナ目指して元気いっぱいスタートする。信号もなく視界を遮るものもないので本当に気持ちいい。誰にも邪魔されずにツーリングを満喫できると思った矢先、マタトウー（タクシー）がもの凄いスピードで走り抜けていった。危ない、危ない。あれだけには気をつけないとやられてしまう。朝の爽やかな風を受け、順調に進み約4時間程でサガナに到着。今日は牧場を経営している方の家へ泊まることになった。そこはご家族皆が敬虔なクリスチャンで、非常に親切にして下さる。押し掛け客の私たちをアフリカの伝統料理のフルコースでもてなし、しかも牧場で飼っていた山羊1頭を私たちのために用意してくれたのである。焼き火を囲み、解体した山羊の肉を目の前で焼きながら食べる。レバーや腸など普段食べる機会もなかな

かないものをご馳走になった。お酒も入り、肉もうまく究極の幸せ。こんなに贅沢で、こんなに楽しくていいのだろうか。しかし私たちも食べ盛りなもので山羊1頭を全部たいらげてしまった。

二月三日 「灼熱地獄」

今日はナイロビまで約100kmの道のり。前日お世話になったご家族にお礼をして出発する。少々アップダウンを繰り返すので昨日のようにスムーズにはいかない。おまけに自転車パンクしたため、予定していた行程の途中でお昼を過ぎてしまった。正午を過ぎると暑さがきつくなるので体力がどんどん奪われてしまう。その上ナイロビ近郊まで来ると交通量が多く危ない。私たちの走行が迷惑になると、自分たちにとっても危険だと判断。車でアチ・リバーまで向かうことにした。浅井がフラフラになりやや脱水症状気味である。車で仲又邸へ移動し、庭で水浴びをさせてもらおう。この一週間で私たちが真っ黒になっていたので仲又さんが驚いていた。



ナイロビからカジヤドに向けて

二月二四日 「中島、栃谷逃げ帰る!？」

合宿前半の疲れを取るため今日は一日フリー。街に出たい者は街へ行き、テントで休む者は休む。しかし、暑くてテントに入ってられないが。

自転車で行った中島・栃谷コンビが目の色変えて走り込んできた。何事かと話を聞くと、非常に恐い思いをしたという。栃谷曰く「前日に仲又さんに教えてもらったレストランに行こうとしたら道を間違えたらしくダウンタウンに入り込んだんですよ。とりあえず飯を食べようと食堂の前に自転車を止めたら町中の人間に囲まれて、そして何やらお金を出せと言ってくる。なんとか断ろうとしたんですけどそのうちムードが険しくなってきた。これはヤバイ!!と思ったら一人の男が寄ってきて『お金を俺によこせば助けてやる』と言うので20\$渡したら、人垣から離れることができ街を案内してくれましたけど。あく恐ろしかったですよ」ということだ。助けてくれた男も信用できなかったの、急いで自転車で帰ったきた始末だという。それにしても二人の顔があまりにも真剣なので、他の上

級生は皆笑いをこらえることができなかった。仲又さんにこのことを話したら「最近の若者は温室育ちですなえ」と呆れられてしまった。

二月二五日 「今日も停滞」

昨日に引き続き停滞。明日から始まる自転車ラウンドの準備をする。しかし合宿の前半を振り返ると、良きも悪きも現地の人は私たちを歓迎してくれたと思う。自転車で走っていると沿道の人々は手を振り、励まし(ヤジを飛ばし?)てくれた。かと思うと土産物屋では高い買い物させられたり、ダウンタウンでは目をつけられた隊員が少々怖い思いもした。いつも何かしら現地の人からのアクションがそこにあった。現地の人とのコミュニケーションが楽しめたと思う。これも感情表現がストレートなアフリカ人の魅力であり、アフリカの魅力だと感じる。

二月二六日 「地平線からの日の出」

今日はナイロビからカジヤド近郊のブルズアイホ

テルまで80kmキロの道のり。暑さ対策のため、まだ日が昇らない暗いうちからアチリバーを出発。ライトを点けているとはいえ、路面の凸凹には気を使う。

しばらく走っているとかなた遠くの地平線がうっすらと赤く染まり始めた。これは美しい。山や海からの日の出なら見たことはあるが、地平線からの日の出は初めての体験。空と大地が朱色から黄金色に変化していく様子は今でもはっきりと覚えている。皆自転車を放っぼりだし記念撮影に興じる（帰国して現像したらどれも真っ暗で写っていなかったが）。美しい光景に一同おおいに感激し気持ちよく自転車を走らせていると今度は動物が現れた。いるいる、シマウマやトムソン・ガゼル、インパラ、ヌー、それからよく分からないレイヨウ類の動物たち。私たちが自転車を走らせる沿道にたくさんいるのである。これぞ私たちが思い描いていたサファリをしながらのツーリング！皆我を忘れて左右に首を振り動物観察を楽しんでいる。「おい、おい、ちゃんと前を見てこげよ」と言おうとしたその時、伴走して先頭



部員で紅一点の浅井

を走っている車がインパラを轢いてしまった。現地のドライバーでさえ気をとられるぐらいの素晴らしい光景であった!?

カジャドを過ぎ2時間ぐらい走って今日の幕場、ブルズアイホテルに到着。まだ完成しておらず、シャワー室やトイレを工事していたがきれいな所。しかし、中庭に自転車停めた途端悲劇は起こった。タイヤの空気がみるみる抜けていくのである。よく見るとタイヤになんと小指の第一関節ぐらいのトゲが刺さっているではないか。目の前の木を見ると同じトゲをびっしりと枝につけている。やられたー。まさか植物のトゲでパンクしてしまうとは、アフリカ恐るべし。ここは日本ではないと、またもや思い知らされたのであった。

ブルズアイホテルに昼前に着き、時間をもてあましてしていると、今日は運良くサファリラリーの初日で、近くでレースが見られるという。サファリラリーといったらケニア最大のイベントと聞いていたのでわくわくしながら見に行く。なるほど、かなた向こうの山の中腹から土煙がもくもくと上がって



真っ直ぐな一本道

る。しかしなかなか私たちの目の前までこない。やっと見えたと思ったらスピードを落として止まってしまった。どうやら私たちがいる100m手前がチェックポイントのようだ。おまけにその後道がカーブしているので猛スピードで走り抜ける場面を期待していたがそうはいかなかった。それでもラリーの雰囲気を楽しむことができ、大満足である。

夜はカジャドのブッチャーで仕入れた肉でニョマ・ボイル。手づかみで口一杯に頬張る。ボイルした時の煮汁で作ったスープもとても美味い。食事が終わって外に出るとサファリラリーのファンであるう若いグループが車を乗り入れてきた。何を始めるのだろうと見ていたら車のライトを点け、カーステレオから大音量で音楽を流し即席ディスコの完成である。彼らの宴は朝まで続いた。

二月二十七日 「キリンの脚は長い」

朝になり眠たげな彼らと話をしてみると、ケニアの人たちで大学では日本語を勉強しているとのこと。「僕たちはこれからキリマンジャロへ行く。」と



キリマンジャロをバックに

言うとなりの子たちが一緒に連れて行って欲しいと言
い出した。是非一緒に行きたかったが合宿中なので
遠慮してもらった。

今日はタンザニアとの国境、ナマンガまでの行
動。道がまっすぐで車も少ないので快適に飛ばす。
すると目の前になんとキリンが現れた。しかも2
頭。どうやら親子のようだ。私たちの目の前を横断
しようとしている。ああ、あの長い脚の下をくぐれ
ないものかとバカなことを考えているうちに草原の
方へ逃げていってしまった。しかし、まさかキリン
まで見られるとは。なんだかいことばかりで怖い
なと思っていたが、案の定最後にはちゃんとハプニ
ングが待ち受けていたのだった。

快適に自転車を走らせて6時間。ナマンガリバー
ホテルに到着。ここには野生のブルーモンキーが住
み着いていて、レセプションで猿に気をつけるよう
に言われる。にも関わらず、早速目の前で翌朝分の
パンを持っていかれてしまった。食糧を入れていた
ダンボールに手を突っ込んで奪っていった瞬間、そ
れまで可愛いらしく見ていた猿に突然憎しみを覚え



「何やってるの？」

る。しかしすでに後の祭りで木の上に登った猿の勝利だった。

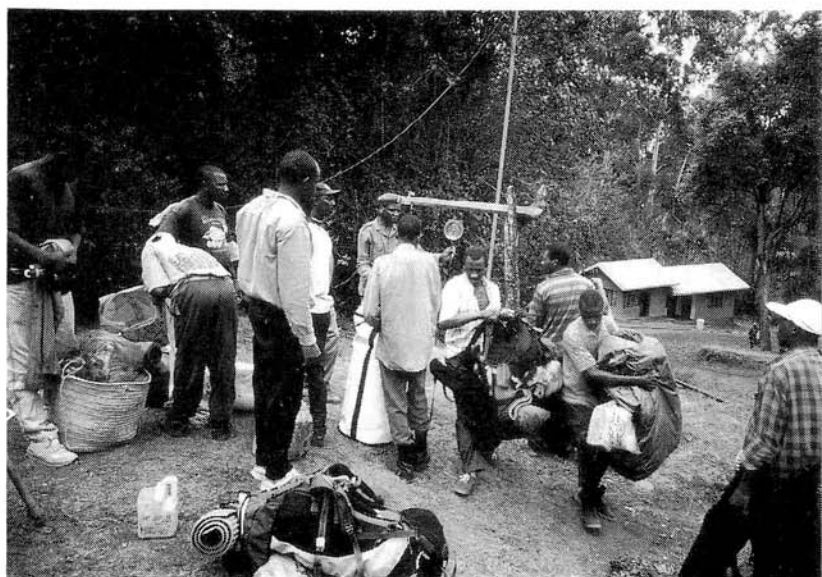
二月二八日 「アフリカでの初めての雨」

昨日の猿のおかげで朝食が少し寂しかったが、今日はアルーシャまで約120kmの道のり。しかしナマンガを超える越境手続きがなかなか終わらない。持ち込む自転車を確認したいというので、7時にくるからと昨日念を押したのに、イミグレーションのお偉いさんが出勤してこないのだ。呼びに行かると、今起きたという。しょうがないかと待ってみるがまだ来ないので再度呼びに行かせると、今度はシャワーを浴びていた。本当にアフリカはポレポレ（ゆっくり、ゆっくり）だなあと半ば感心して諦める。ようやくタンザニに入国できた時には9時前になっていた。しかし、気をとりなおしてアルーシヤを日指す。ケニア側に比べ路面の整備が粗い。いたるところに大きな穴が空いている。出発が遅かったので徐々に暑さが増してくる。今日120kmも走れるのか不安になるがとりあえず行くしかない。14

時ぐらいから雨が降り始めた。アフリカでの初めての雨である。雨により暑さも抑えられ16時にはアルーシャのマサイ・キャンプに到着できた。今日は行動時間が長かったのでさすがに皆疲れた様子だったが明日で自転車の行動も最後である。その後はキリマンジャロ登山が待っている。

三月一日 「アフリカン・ダンスで藤田メロメロ」

いよいよツーリング最終日。残すところモシまでの80km。基本的に下り基調なのでペースはよい。途中雲が晴れてキリマンジャロ山がその雄姿を現す。いよいよ合宿も佳境に入ってきた。11時過ぎにキリマンジャロの登山基地、モシに到着。同時に自転車で行動も終了。ここまで事故もなく本当に良かった。動物もたくさん見られたし最高である。これまでの成果を祝いたいとロッジのママに話すと、近所の仲間を集めてトラディショナルダンスで歓迎してくれるという。昼過ぎになるとどこからか人が集まってきた。どうやらちょっと練習するようだ。太鼓の音に合わせて何だか楽しそうである。夜が待ち遠



入山口で荷物の重さを量るポーター

しい。

今日のディナーはチキンの丸焼き（1人につき1羽）、バナナのフライ、ピリピリにサラダと豪華なもの。そしてママの好意による歓迎の踊りつき。食事を味わいながら踊りを楽しむ。そのうち酔いもまわって陽気になってきた。こうなれば藤田の出番である。日本から持参した柔道着をヒラヒラさせ踊りの輪に入る。そして女性が歌う声、どうしてこんなに心地よいのだろう。陽気で優しく、そしてなんだか懐かしい。この日は遅くまで至極の夜を楽しんだのであった。

三月二日 「監督合流」

昨夜の酔いも覚めないまま、街の中心部へ監督を迎えに行く。Y M C A 宿舎前で待ち合わせである。ここで46代渡辺OBにも合流できた。渡辺さんは明日から別ルートでキリマンジャロに登るそうだ。監督をロッジのママに紹介すると、今夜も歓迎のダンスを踊ろうかと言われるが、登山の準備があるのでお断りした。本当にアフリカの人は陽気である。

三月三日 「長友サイフすられる」

明日から始まる登山の準備に買い出しに出ようとバスに乗ったが、非常に満員であった。座る場所は勿論なく、立っただけでもつかまるところがない。周りの人にぎゅうぎゅう押されながらやっと目的地についてポケットを探ると、サイフがない。「やられた！」大声で誰か俺のサイフをとっただろうと叫ぶが後の祭りである。幸い所持金を二個所に分けて携帯していたので、二千円程度の損害ですんだが、かなり落ち込む。

三月四日 「キリマンジャロ登山開始」

いよいよキリマンジャロ登山の開始である。キリマンジャロ山(5896m)はスワヒリ語でKilimanjaro、*kil*は「輝く」と言われている。その名の通り一年中山頂付近に氷河や氷雪を抱いている。赤道直下にもかかわらず氷河があり、アフリカ大陸最高峰ということで有名な山だ。今回私たちの選んだルートはメジャーなマラングルートではなく、まだ利用者の少ないマチャミルルートを選ん

だ。マラングルートが通称「コカ・コーラルート」と呼ばれるのに対し、マチャミルルートは「ウイスキールート」と呼ばれ、どのルートよりも素晴らしい景色が得られるということだ。

ロッジから手配したツアー会社のバスでマチャミ村まで移動する。そこでポーターと荷物を分け、登山開始となる。今回はケニア山での反省を生かし、水分を無理にでも多く取り、ゆっくり歩くことを心がける。今日は3000mのマチャミハットまでで5時間ほどの行動。しかし、いきなり雨に降られ、げんなりする。もしかして毎日雨が降ったりして、という予想が見事的中する羽目になることをまだ知らない。17時にマチャミハット到着。私たちのほかに2パーティがテントを張っている。ポーターたちは荒廃した小屋で寝ようだ。南西の方向にメル山が奇麗に見えた。まるで日本の富士山のような美しい山容をしている。

三月五日「まだまだ余裕です」

7時起床。今日は標高3800mのシラハットま

で約5時間の行程。ケニア山で高度順応できたのか皆足取りも軽い。途中雨に降られ、シラ台地に出ても景色がない。幕場につくと我々より一足先についた中村OBがポーターから荷物を受け取って下さっていた。とりあえず岩陰で一息ついていると、給仕係のポーターが熱い紅茶とビスケットを持ってきてくれる。夕方になると急に雲も晴れ、太陽の光が射す。あっという間に雲海が眼下に広まり辺りはまさに雲上の幕場と化した。

三月六日 「アンパンマン!？」

今日は3900mのバランコハットまで約6時間の行程。高度差はほとんどないのだが高度障害が少しづつ現れる。おまけにまたまた雨で、決して快適な登山とは言えない。幕場について夕食を摂ろうとするが、あまり食欲がわかない。そして鏡を見てかなりびっくり。私の顔がアンパンマンのようにむくんでいる。やばい、浮腫が出ている。明日は4600mまで上がるのに不安になってくる。他の元気な部員を尻目にそそくさとシュラフに入るしかなかった。



浮腫によりアンパンマン状態

三月七日 「なんで？」

さて、今日は4600mのバラフハットまで700mの登りである。さすがに4000mを超えると個人のペースの差が大きくなる。中村OB、藤田はさくさく前を歩き、浅井、徐がその後を追う。そして最後を栃谷、中島、私が歩くのだが、4200m付近で頭が割れるように痛くなる。栃谷、中島に先に行ってもらい、私はガイドと一番後ろからゆっくり歩く。それにしても辛い。吐き気、頭痛を我慢し登る気持ちは酔っ払った後の二日酔いでトレーニングする時以上の気分の悪さだ。とにかく涙が出てきそうになる。数歩進んではしばらく休んでを繰り返しゃっとの思いでバラフハット到着。よく見ると、ポーターもバテていたりする。とにかく、飯を食える分だけ食べ、明日の山頂アタックに備え、皆就寝。しかし4600mという高度では、誰も寝付けなかった。

三月八日 「キリマンジャロ山登頂」

今日は夜23時に起床し午前0時にアタック開始と



シラ (C2) の幕場

いう過酷なスケジュール。睡眠時間もないようなものである。それでもガイドを信用してアタックを開始する。ケニア山の時と同じようにやはりヘッドランプを点けての行動。ケニア山時には見られなかった浮腫（むくみ）が顔や手に現れる。酸素が薄い、頭が痛い、足取りも重いと山頂まで登れるか不安になる。それでも少しずつ歩を進めなんとカマチャミルートのトップ、ステラポイント（5758m）まで到達。キリマンジャロの最高点はウフルピーク（5896m）だがここまでくれば登頂が認められるのだ。ここで高山病により体調の悪い者は引き返し、元気な者だけでウフルピークを目指すことにした。ウフルピークには初代ニエレ大統領の独立宣言が記された銅板のレリーフがあった。キリマンジャロは1960年代アフリカ植民地独立の象徴でもあるようだ。

登頂後はいっきに3100mのムエカハットまで下山。登頂後の方が体調悪い者が多く、長友は吐いてしまう。

三月九日 「いよいよ下山」

翌日、ムエカ村まで下りる。ガイド・ポーターにチップを支払い、私たちの合宿は終わった。無事キリマンジャロ全員登頂という結果で合宿を終えることができた。

今回の合宿のために、私たちは一年がかりの準備を費やした。日本人にはまだまだ情報のすくない地域であったので計画してからその実施まで多くの苦勞もあった。しかし、その苦勞も忘れるに十分過ぎるほどの経験を得られたことを確信している。

アフリカが教えてくれたものは何だったのだろうか。今思い返してみるとそれは、素朴さ、生真面目さ、率直さという言葉で私の胸に響いてくる。皆が皆そうとは限らないだろうし、都市部と農村部との違いこそあるだろうが、私たちが触れ合うことができたアフリカの人々は、自然の恵みを甘受し、自分の日課を全うし、そして生真面目に生きていた。少なくとも私の目にはそう映った。多くのアフリカ人は私にとってそれだけでも魅力ある人々である。

今回の合宿で私はアフリカの魅力に引き込まれて



キボ峰と対峙するマウエンジ峰



隊長 中村OB

しまった。まだまだアフリカについて知りたいことがたくさんある。だから近いうちにまたアフリカに行きたいと思う。



オ～オォ、輪になっておどろう

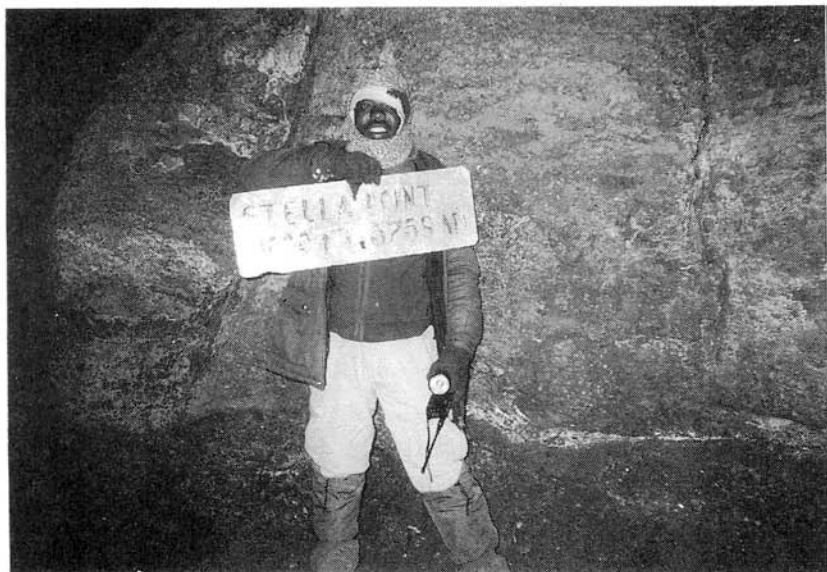


ガイド、ポーターの皆さんお疲れ様

行動概略

行動

日付	行程	時間又は走行距離(休憩含)
2/13	甘泉寮泊	
14	東京発12:00～ムンバイ(インド)着22:00	
15	ムンバイ発10:30～ナイロビ着15:00	
16/17	出発準備	4
18	ナイロビ8:00＝ナロモル14:00～メットステーション18:00 C1	h 0 0 7
19	C1 7:30～マッキンターズキャンプ15:00 C2	h 3 0 1 1
20	C2 2:10～レナナピーク7:15～メットステーション14:00	h 5 0
21	ナロモル停滞(リバーゴジ)	7
22	ナロモル7:40～サガナ(ルンディ邸)11:30	9 km 22.5km/h 8
23	サガナ8:00～ナイロビ近郊(スタアム前)13:40	9 km 17.8km/h
24/25	ナイロビ停滞(仲又邸)	7
26	仲又低6:00～カジヤド(ブルズ7H)10:30	6 km 23.0km/h 6
27	カジヤド8:10～ナマンガ(リバーH)11:35	5 km 25.2km/h 1 1
28	ナマンガ7:00～アルーシャ(マサイキャンプ)15:40	7 km 21.2km/h 8
3/1	アルーシャ7:00～モシ(ルンディ邸)11:10	9 km 24.7km/h
23	モシ停滞	5
4	モシ8:00＝マチャミゲート11:30～マチャミハット17:00 C1	h 3 0 4
5	C1 8:30～シラハット12:50 C2	h 2 0 6
6	C2 8:30～バラコハット14:30 C3	h 0 0 6
7	C3 8:30～バラフハット14:30 C4	h 0 0 1 2
8	C4 0:10～ステラポイント5:30～ムエカハット13:00 C5	h 5 0 3
9	C5 8:30～ムエカゲート12:00(下山完了)＝アルーシャ	h 3 0
10	アルーシャ＝ナマンガ＝ナイロビ(仲又邸)	
11	ナイロビ停滞	
12/13	マサイ・マラにてテントサファリ	
14	"	
15	合宿打ち上げ	
16	ボンベイ(インド)にてトランジット	
17	本隊帰国	
18	長友、中島帰国	



アシスタントガイドとステラポイント



かわいいアフリカの子供

係
報
告

50代アフリカ合宿 装備係報告

(合宿前) ・ 修工、自転車修工の作成

—— 特に問題なし

—— 調査のときに装備をデポする

—— エスパースをデポしたのに、ダ
ンロップをデポしたと勘違いし
たため合宿は、エスパース2張
りで行った。エスパースでは疲
れが取れにくかった。

—— これは、装備係のミスである。

・ 事故の際、自転車用ヘルメットでない
と、保険金が全額下りないので、自転
車用ヘルメットを揃える。

・ 19代左近允OBよりネガフィルムを
100本、33代庄OBより、ポジフィ
ルムを20本いただいた。

(合宿中)

*** 出国時**

・ 預ける荷物(一人25kg以下)と持ち込
む荷物(一人10kg)の二つに分けて飛

行機に乗り込むとしたが、エアリー
ンディアさんの好意により30kg分のと
ころを10kg分超過料金(6万円)にし
てもらった。

*** 空輸後の自転車の調子**

・ 隊長中村さんの自転車の前輪のギア
が内側に曲がる。

—— 空輸の際に曲がったものと思わ
れる。ペンチで曲げようとした
が、出来なかった。3速には入
らず、2速で走ることになる。
特に行動中、支障が出ることは
なかった。

・ 新人栃谷の自転車のブレーキがはずれ
る。

—— すぐに元に戻せた。

・ 3年浅井のサイクルメーターが破損し
た。

—— 修理不可能であった。

*ケニア山ラウンド

・2月19日1年栃谷がヘッドランプの蓋をトイレに落とす。

—— 使えなかったことはないが、使いにくいという理由で、ナイロビで新たに買いなおすことにした。

不注意による装備の紛失である。反省を求める。

*ナイロビでの停滞中

・2月24日ナイロビで、替え電球を4人買い足したが、電圧が異なるため、すぐに切れた。海外では、日本と同じものを買えない可能性があるため、日本で買い揃えていくべきだった。

*ナイロビでの停滞中

・2月28日新人栃谷の前輪のブレーキシューのねじが、調整中に折れてしまいとれなくなってしまう、直しようがない

かった。

—— 調整の仕方にミスはなかったの
で、不良品だったのではないか。
前輪のブレーキが効かなくなっ
た。ブレーキの効かない自転車
に新人が乗るよりは、3年が乗
る方が危険を回避できるだろ
うし、残り1日の行程に大きな
下りもないので、故障した自転
車に3年が乗ることとした行動
中、特に問題はなかった。

・パンクに関して

—— 3年長友が1回、徐が2回、藤
田が2回、2年中島が2回パン
クしたが、修理に関しては各自
迅速に出来ていた。が、刺のあ
る樹のそばに駐輪したためにパ
ンクさせてしまったことがあっ
た。海外では、国内では考えら
れない事が起こる。その他のパ
ンクの原因としては、くぎを踏

んだためとチューブの空気を入れる部分が故障したことがあった。

＊帰国時

・3月16日2年中島が航空券を紛失する。
—— その結果、再発行の手続きのため、3年長友と一緒に一日インドで過ごすことになり、帰国が一日遅れてしまった。個人の不注意のために隊全体に迷惑をかけてしまった。このようなミスはやってはならないミスである。非常に情けない。

・2年中島が部のカメラを紛失する。
—— 輸行袋の破れた部分から落ちたと考えられる。自己管理不足である。

(合宿後)

・テントと無線の装備点検をやる。
—— 問題なし。

(まとめ)

・今回のように、下界の活動が多く、軽量化の必要がない場合は、たとえ、人数が少なくても、エスパースではなくダンロップを使用して、快適さを追求してもよかったであろう。

・海外ノウハウについて

①用心棒を各自、購入することにした。
—— 飛行機で自転車を運ぶ場合、丁寧に扱ってもらえないことを考慮すると、用心棒は必要であった。

②銀マットやビニシをディレイラーの保護に利用する。

③「BICYCLE:HANDLE WITH CARE」というラベルを貼る。

・全体として言えることは、新人と2年が装備に関してだらしないということである。新人栃谷に関しては個人装備の置きっぱなしが目立ち、冷や冷や

させられた。この状態では、新人指導は出来ない。猛反省を必要とする。また、2年中島に関しては、言語道断である。こんなミスは2年の最後でやるようではどうしようもない。こんな2年だから新人もミスを犯してしまうのだ。今後、3年となり、リーダー層へと成長していかないといけない時期なのだということを自覚し、今後のワングル活動において、気を引き締めて取り組むことを誓う。

文責 中島 一彦



アフリカ合宿食糧係報告

〔合宿前に行ったこと〕

・現地で購入可能な食物の調査

道祖神より、情報を得る。また、長友の事前調査の際に各地域でどこまでの食物が入手可能か確認。調味料、米はナイロビで全て買い出しを済ませ、野菜、肉、水については各地で買うという予定を組む。

・スクーリングの実施

「病人食」のスクーリングを行う。

・「ケニア到着当日の食糧」・「病人食」・「お茶」

・「調味料」の食袋を作成。

「ケニア到着当日の食糧」については、到着当日は買い出しに行く時間は無いだろうという予想から、日本で作っていくことにした。実際には、時間がとれたため、野菜、肉を購入。

〔合宿中〕

・適時買い出しを行う。

計画通り、基本的にナイロビで調味料を揃え、

野菜、肉などは足りなくなったら買い足すことにした。ナイロビでは、日本のスーパーマーケット規模で買い出しが行える。細かくみると、

●米

ウチユミ、ナクマツトではタイ米、ケニア米が入手可能。タイ米は過去に日本にも出荷されたこととはあるので、味はそのまま。個人差はあるが特に問題はない。ケニア米は、品質の悪い物（ブロークンライスと記入されていたを買ったせいとか、小石が混ざっていたり、匂いがきつかったり食べられないものが出た。店や御馳走になった時食べたケニア米は特に問題がなかった。米の質が違うのが大きいと思うが、調理方法も基本的には油で炒めてから食べるようだ。

日本米は「日本人倶楽部」で入手可能。正確にはカリフォルニア米だが、中身は日本米と変わりなし。（日本人がカリフォルニアで日本米を作ったというだけらしい。）結局、合宿中も一番多く使った。10 kgで2000 ks。

●調味料

多用したのは、クノールの粉末スープシリーズ。1袋で4人前。また、缶詰スープも頻繁に使った。買い出し1回目では、係の語学力不足で、適切な分量が買い出されず、味が薄くなるということになったが、ちゃんと英語の説明を読めば全く問題なし。コンソメのようなものとして「ロイコ」という商品があり、現地の人々は味付けの足しによく使うようである。私達もよく利用した。カレー粉は、本当に辛いだけの粉である。味は無い。恐らく、日本の某カレー専門チェーン店の辛さ調節粉と同じもの。日本の調味料は（日本人 倶楽部）で手に入る。が、醤油や、味の素などもウチユミで売られていた。

●野菜

どこでも入手可能。人参、じゃがいも、玉葱、ピーマン、トマトなどがメジャーである。また、スクマウイキという日本のほうれん草のようなものがあり、これを炒めたものが日本の漬物感覚で食卓に並ぶが、私達では作り方が分からないので利用はしなかった。他の地域に比べると、ナイロビ市内のスーパーマーケットでは野菜は高い。

●肉

どこでも入手可能。ナイロビなら、どの肉でも手に入る。しかし、ブッチャーにおいてあるのはほとんどが牛肉である。合宿中はほとんど牛肉を食べていた。モシの市場には、宗教上の理由から豚肉はなかった。鶏肉はあったが、生きたままでの販売だったので、購入はしなかった。魚もモシの市場で見ることができた。おそらくティラピアだと思われる。ナイロビのサリットセンターのウチユミなら北欧から輸入された魚類が買える。が、値段は高いとのこと。

●水

どこでも入手可能。だが、5Lのボトルがおいであるのはナイロビぐらい。大体1・5Lのボトルで売られている。よって、ナイロビ以外で大量の水を買う際には割高になる。キャンプ場では、水道水を煮沸して飲んだりしたが、それが原因で病気になるということとはなかった。

●パン

ナイロビでなら容易に入手可能だが、他の地域

にいくと、売ってないわけではないが、勝手を知らない私達には探すのが一苦労だった。

・食当について

ケニア山、キリマンジャロ山での食事（どちらも朝・昼・夕）は完全にポーターに任せた。それ以外の自転車ラウンド行動中、停滞日は基本的に自炊したが、好意により、時々でお世話になることもあった。

また、各ラウンドの区切りにはレストラン等で軽い打ち上げを行った。食当の内容は特に普段と変わらない。メニューは基本的に米とスープで洗い茶をして、夕飯後にはT・P・で菓子と紅茶を飲んだ。

・行動食について

ケニア山登山時には昼食が出たため、登山時にはあまり行動食は使 用しなかった。が、自転車ラウンドでは予定していた量よりも多く消費した（計画では1日ビスケット4箱だったが実際には6〜7箱）。一度、ナイロビに帰って来た際に、一回目の買い出しの際の行動食が余っていること、

消費量に個人差があること、行動食を買うことが困難ではないという理由から、その先の行動食は個人で用意することとしたが、特に問題はなかった。

・火器について

ガス缶がナイロビでしか手に入らないという理由から、安価である七輪を火器として使用。火をつけるのに時間はかかるものの、一度火がつけば火力は強い。ガス缶は日本で使用できるEPI缶やプリムス缶と比較すると、火力が弱いため、食当にかかる時間は結局七輪と同じくらいだった。最終的には、安定性、経済性がよいため七輪を使用。ただし、火のつきが遅いので、食当の者が、早起きして火を起す必要があるなど、問題点はあった。

・病人食について

病人食は事前のスクーリングの結果より、「日本食」を中心にして作った。実際に体調不良者がでた際には、食欲そのものがなかったことに原因はあると思うが、有効には利用されなかった。む

しろ、病人食という立場としてよりも、日本食として重宝した。今後、海外で合宿が行われる時には、病人食という形にこだわらず、日本食を持っていくと心強いだろう。

(まとめ)

今回は事前の調査により、どこで何を買えるのかということがわかっていたので、計画通りに買い出しが出来、非常によかったと思う。最後にかなり食材を余らせてしまったのは残念ではあるが一回街に出て買い出すというのは、意外と面倒なことであったので、不足するよりはよかったのではないかと思う。今後も、勝手が違うところではある程度多めに食材を用意するという考え方に間違いはないとおもう。

食当については、七輪を使用したことで普段国内で行っているように、食当技術の確認という事は出来なかったため、アフリカ合宿後に下界でテント内食当を行い、新人指導に向けて再確認した。現地の食事については個人差があるので特に上記していないが、全く問題なく食べることができた。今回はあまり好評ではなかったが、現地の人

とお互いの食を食べ比べるというのなかなか面白いのではないだろうか。

文責 藤田 亮助



山での食事

アフリカ合宿医療係報告

《合宿前》

事前の調査の結果、ナイロビには十分な医療機関、薬局等があることが分かったので当初は軽量化のため、医箱を現地で作ることを考えていたが、慣れた薬を使った方がよいとの指摘を受け、日本では売っていない抗マラリア薬以外は日本の薬を使った。また高山病対策のため、利尿剤ダイアモックス^①、さらに、下痢止めロペミン^②を薬科大学山岳部OGの坂元さんに分けていただいた。

予防接種は調べた結果、黄熱病（ケニア、タンザニアに入国する際に予防接種を受けることが義務付けられているため）、破傷風（特に自転車ラウンドでの転倒によるケガに対して）、A型肝炎（罹患率が比較的高く、一度かかると完治が難しいため）の3種を受けた。

スクーリングは、ビタミン剤、アフリカの風土病について行った。

《合宿中》

週に一度抗マラリア薬を飲んだ。

・山ラウンド

①高山病のためケニア山に長友、中島が登頂することができなかった。

②キリマンジャロ山では、ほぼ皆に軽い高山病の症状が出ていたが、ケニア山での高所順応の成果が出てステラポイントまで無事登頂できた（ケニア山・キリマンジャロ

山での各人の体調の変化は下記参照のこと）

③両山ともダイアモックスは使用しなかった。

・自転車ラウンド

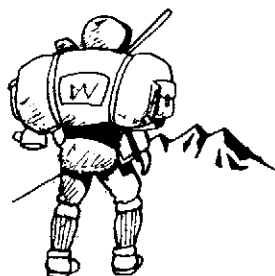
2月28日の行動中、浅井が体調不良のため、伴走車に乗って次の幕場まで行くことにする。次の日は体調は悪かったが行動に支障はなかった。

《まとめ》

長期の合宿であったため、ほぼ全員に一度は下痢などの症状が現れたが、一番の心配であった自転車ラウンドでの交通事故や、山ラウンドでの重度の高

山病などがなく大変良かった。皆で意識しながら合宿に取り組んで行けた結果であろう。

なお、関先生、坂元さんには、多くの薬を都合していただきました。大変ありがとうございました。



アフリカ合宿傷病リスト

症状	原因	処置及び使用薬品	傷病者
下痢・吐き気	暑気あたり	パブロンを飲んで安静に	中村隊長
下痢・腹痛	慣れない食生活	正露丸の服用	ほぼ全員
風邪	環境の変化	パブロンを飲んで安静に	中村隊長 徐藤柝

ケニア・キロマンジャロ山の体調変化

長友↓(ケ)

4000m付近から頭痛。4500m以上になると、すぐに息が切れ頭痛も強くなる。

(キ) 3600mまで下りると頭痛は治まる。
4000m付近から頭痛。4600m

付近で浮腫、重度の頭痛、吐き気、食欲不振。3000mまで下りても頭痛、浮腫ともに治らず。

徐 ↓(ケ)

4200m付近から動悸、息切れが激しくなる。頭痛はなし。

(キ) 3900m付近から咳が止まらない。

4500mを越えると息切れが激しくなり咳も酷くなる(軽い肺水腫と思われる)。下山時に軽い頭痛。

藤田↓(ケ)

4100m付近から軽い頭痛。下山時に吐き気、強い頭痛。

(キ) 登りは問題なし。下山時に猛烈な頭痛と吐き気。

浅井↓

両山とも高度によると思われる体調の変化は特になし。

中島↓(ケ)

3900m付近から頭が重い感じ。
4000mを越えると猛烈な頭痛。

4500m付近からは休む度に倒れ込む。3000mまで下っても頭痛治らず。

(キ)

4000m付近から頭痛。高度を上げると頭痛は酷くなるが、自分のペースで歩けば耐えられる程度。

栃谷↓(ケ)

4000m付近から頭痛。4500m付近から息切れ、強い頭痛、めまい。

(キ)

4000m付近から頭痛。4600mになると頭痛が酷くなり、息切れしやすくなる。ピーク付近ではさらに足下がふらつき吐き気もする。

以上を見てみると個人差はあるものの、4000m付近で高山病と思われる症状が出ている。また、人それぞれになりやすい症状があり、ケニア山とキリマンジャロ山の場合を比べると、高度順応ができ、同じ高度で出る症状の程度は軽くなっていることが分かる。

文責 徐 宗聖



山頂は晴天でした

アフリカ合宿 気象係報告

合宿前の準備

・海外の合宿の計画をはじめた当初から、アフリカにおいて天気図をつけることはできないので、観天望気にたよるということになっていった。そのため49代下半期から各合宿において部員の観天望気力アップを目的とし、より観天望気に重点をおいた気象解説を行ってきた。また合宿の気象係報告に観天望気の結果及び観天望気の解説を必ず行うことにするなど、個々の部員の観天望気に対する意識を日頃から高めるようにしてきた。

・アフリカ合宿前に「アフリカの地域気象」のスクーリングを行った。それと併せて観天望気のスクーリングを再度おこなった。

アフリカの気象状況の把握

・インターネットでアフリカの気象情報を検索した。しかし情報はほとんどナイロビのものばかりで、気温・気圧野平均値の情報が得られたのみであった。

・アフリカに関する文献から気象に関する記述を抜粋し、それを集めた。しかしこれも大した情報量にはならず、アフリカの気象を詳しく知ることはできなかった。

・過去にアフリカで活動したことのある方(JACC や早稲田のサイクリングサークルなど)に話しを伺った。

・長友が調査の際に購入したキリマンジャロに関する文献を日本語訳した。

以上の調査結果を「アフリカの地域気象」と題してスクーリングをおこなった。

合宿中

・おおまかに朝・昼・夕の3つに時間を分け、観天望気をおこなった。

・天気図がつけられず、アフリカの気象が大きな時間軸で変化する気象というのではなかったため、天気予想はできなかった。

・アフリカの天気予報をラジオで聞こうとしたが、天気予報の時刻になっても天気予報は流れなかった。しかし乾季であり、基本的に雨が降らないと

いうことと、空を見れば天気が一日瞭然であるといふことを考え合わせても特に天気予報は必要なかった。

アフリカの気象の考察

・早朝は快晴、9時頃から雲が増えて行き、夕方4時〜5時くらいに再び雲が少なくなっていくというパターンであった。特に天気パターンは山岳ラウンドで顕著であり、口中は雲り(霧)が雨というパターンが多かった。

・朝・夕、または太陽が雲に隠れると肌寒く感じられる。またナイロビでは高度が高いため、夜は予想以上に冷え込んだ。

・タンザニア(アルーシャ・モシなど)はケニアに比べて高度が低い地域であったので、湿度が高く、じめじめした暑さであったが、ケニア側ではカラッとした暑さで過ごしやすかった。

合宿中の天気

合宿中に行った観天望気の結果をおおまかに・朝(7時頃)・昼(12時頃)・夕方(16時頃)の3つに分けて行った結果を記す。

2月18日(ケニア山、〜メットステーション)

・快晴

・積雲がぼつぼつ浮かぶ

・層積雲が見られた。量が多い。

2月19日(メットステーション〜マッキンタイズキャンプ)

・快晴

・積雲と高積雲が混ざり合ったような雲が浮かぶ

・高層雲。時折ガスがかかる。

2月20日(マッキンタイズキャンプ〜山頂〜下山)

・高層雲。山頂では下に層積雲が見られた。

・積雲のような雲が所々浮かぶ

・積雲。多少量多い。ケニア山には高層雲がかかっていた。

2月22日 (ナルモル〜サガナ)

・快晴

・積雲。量は少ない。

・積雲量が段々少なくなる。

2月23日 (サガナ〜ナイロビ)

・積雲。雲の量が多い

・積雲が浮かぶ。遠くに積乱雲

・積雲

2月26日 (ナイロビ〜カジャド)

・快晴

・積雲。雲の量は多くない。

・積雲。雲の量は少なくなる。巻雲が見られる。

2月27日 (カジャド〜ナマンガ)

・快晴。所々に積雲が見られる

・積雲の量が多少増える

・雲量は変化無し。

2月28日 (ナマンガ〜アルーシャ)

・高積雲

・メルー山に発達した積雲がかかっていた。その影響で15時頃から15分程雨。

・積雲

3月1日 (アルーシャ〜モシ)

・積雲

・積雲の量が増える

・積雲

3月4日 (キリマンジャロ山〜マチャミハット)

・積雲がポツポツ浮かぶ

・乱層雲が山を包み、2時間程強い雨が降った。

・積雲と高積雲が混ざり合ったような雲が浮かぶ

3月5日 (マチャミハット〜シラハット)

・快晴。山頂に笠雲が見えた。

・乱層雲が山を包む。時々ガスがかかり、雨が降った

・高積雲と積雲が混ざり合ったような雲。層積雲

(雲海) 見られた。

3月6日 (シラハット〜バランコハット)

・快晴

・ガスがかかった。

・14時頃から強い雨。ガスが濃い。その後は降りたり止んだりする状態が続いた。乱層雲

3月7日(バラフコハット〜バラフハット)

- ・量は少ないが高積雲が浮かぶ
- ・ガスがかかったりかからなかったり、という状態が続く。高層雲。

- ・15時〜16時の間、ひょうが降った。

3月8日(バラフハット〜山頂〜ムエカハット)

- ・下は層積雲。上は高積雲。雲の量が多い。
- ・高層雲
- ・高層雲が発達し、17時頃から雨が降った。

3月9日(ムエカハット〜下山)

- ・積雲
- ・積雲が浮かび、遠くに巻雲がみられる。
- ・積雲

まとめ

日本の四季というものが存在せず、雨期と乾季におおまかに分けるアフリカの気象というものになじみがなかったため、最初は国内合宿の感覚で天気を捉えようとし、アフリカの天気というものに違和感を感じた。アフリカの天気は、乾季なら基本的に「晴れ」、雨期なら「雨雲が発達しやす

く、雨雲が近づいてくれば雨」という非常に分かりやすいもので、遠くの空を見ればこれからの天気が一目瞭然で、特に天気解説などする必要もなかった。

日本と違い、遠くまでが見渡せるその広い大地は、雲を広範囲で見ることができ、各人観天望氣の力をアップさせることができたと思われる。

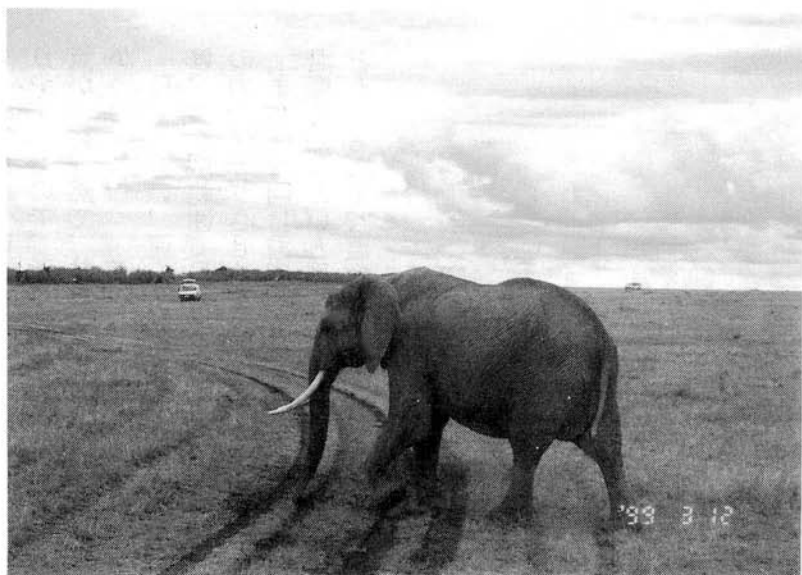
また、今回は温度計等もっていかなかったが、温度を知りたいと思う時もあり、これからの参考ともなるので、温度計・湿度計はあるとよかった。



文責 浅井瑞穂



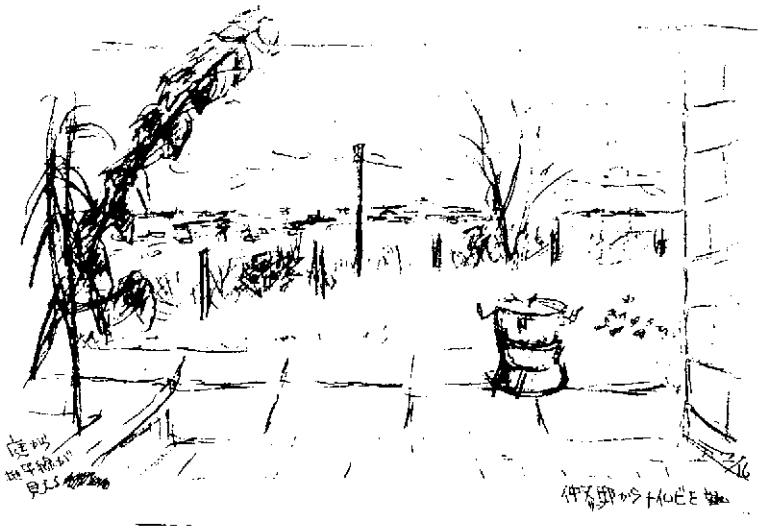
アフリカの空



マサイ・マラ国立公園

会

計



海外合宿資金計画

言葉の定義

『予算』 私たちが実際に衣食住するのに必要な金額。緊急時への対応の金額は含まれていない。

『貯蓄額』 現在の私達が行っている計画で海外合宿までに貯まる金額。

『個人借入額』 ワンゲル基金から個人がいくら借りるか。

『借入総額』 ワンゲル基金から総額でいくら借りるか。

『遭難対策準備金』 不測の事態に対して支払う金額。よって計画の最初からこの金を使って衣食住することは考えない。

隊員内訳 隊長1名 3年4名 2年1名 1年1名 計7名
 (3/2からは監督も合流)
 予算 440万円

予算内訳	7人支出	備考
道祖神手配旅行代金	2,961,000	内容は次ページを参照
保険費	97,160	泊46日まで
フライングドクター 制度加入料金	19,320	23米ドル/一人
ビザ料金(タンザニア ・ケニア・インド)	48,650	タンザニア 3,250円 ケニア 3,000円 インド 700円 (全て一人当たりの金額)
医療費	175,000	薬代・予防接種料金等 1人25,000
装備費	20,000	七輪・炭・ガス缶等
食糧費	150,000	
記録・写真費	65,000	フィルム代・現像代等
自転車保管料	2,520	ナロモル・アルーシャ 140KS/1日×9日
サガナお礼金	4,000	
チップ料金	80,000	ガイド・ドライバー 20米ドル/1日
成田エクスプレス料金	36,400	東京ー成田空港第2ビル間往復
長友調査費用	294,056	
報告書作成費用	200,000	
諸雑費	246,894	
合計	4,400,000	

1 米ドル 120 円換算
 1 KS 2 円換算

道祖神手配料金内訳	1人支出	7人支出	備考
渡航費	140,000	980,000	成田—ナイロビ往復
ケニア山トレッキングツアー料金	28,200	197,400	1人約 235米ドル
キリマンジャロ山 トレッキングツアー料金	114,000	798,000	1人約 950米ドル
キャンプ料金 (10泊)	4,800	33,600	1人 4米ドル/1泊
護衛警官代	400	2,800	2カ所で各 2名
2/18の昼食代	3,000	21,000	調査時の金額より
ガイド・ドライバー雇用費、 車両費、代理店手数料	132,600	928,200	
合計	423,000	2,961,000	

1米ドル 120円換算
1 K S 2円換算

予算負担内訳及び借入金額について

予算 440万円

これより、道祖神手配料金 (計 296万 1千円) と部費 (10万)、海外繰越金 (40万) を引くと、

$440万 - 296万 1千 - 10万 - 40万 = 93万 9千円$

この、93万 9千円を隊員 7名で頭割りすると、一人当たり 13万 3千円以上より、

13万 3千円に道祖神手配料金 (一人 42万 3千円) を足したものが、55万 8千円。これを切れよくして、結果、隊長負担額は 56万円 とする。

この隊長負担額をもとにして、現役負担額を計算する。

貯蓄額の部員 6人の総額は

$53万 5千 \times 4 + 45万 \times 1 + 24万 \times 1 = 283万$

これに部費より 10万と海外繰越金 40万を加える。

よって貯蓄額を 333万とする。

予算 440万 - 隊長負担額 56万 - 貯蓄総額 333万 = 51万

51万を部員 6名で頭割りすると、

1人 8万 5千円 をワングル基金から借入。

よって、各負担額は

隊長・・・56万

3年・・・62万 (貯蓄額 53万 5千円 + 個人借入額 8万 5千円)

2年・・・53万 5千 (貯蓄額 45万 + 個人借入額 8万 5千円)

1年・・・32万 5千 (貯蓄額 24万 + 個人借入額 8万 5千円)

一方、監督参加費は約 35万円である。

また、遭難対策準備金として 80万円を遭難対策資金から借りていく。

借入総額 $56万 + 8万 5千 \times 6 + 35万 + 80万 =$ 計 222万円

隊長 部員 監督 遭難対策準備金

ただし、借り入れた内、隊長負担額 56万、監督参加費 35万、遭難対策準備金の使用分については返却しない。

文責 藤田 亮助

アフリカ合宿会計報告

〔予算〕 440万+監督参加費35万 計475万。この内20万は
報告書作成費へ。よって合宿自体に使える金額は 455万円

〔支出〕

・道祖神への支払い	3,240,935円
・長友調査費用	295,056円
・通信費：現地からの下山報告時の電話代 現地からの葉書代	49,887円
・装備費：自転車用品、火器、電池代等	31,744円
・食糧費：食当、店で食べたもの、打ち上げ含む	150,369円
・医療費：予防接種料金、薬代	152,520円
・保険代：AIU保険料金、フライングドクター	116,480円
・移動費：現地でのバス・タクシー代 成田一部室間往復料金、ビザ代	119,036円
・チップ：現地のスタッフ、登山時のポーター・ ガイドへの支払い	198,000円
・写真費：ネガは朝日新聞社にお願いしたが、それ 以外の焼き増しなどにかかる費用	55,702円
・雑費：自転車空輸時の取扱注意のシール、 荷物超過料金、ビデオテープ代、土産代等	103,987円
・チケット紛失 に伴う費用：長友のホテル代・食事代・チケット 手数料	21,924円
中島は本人のホテル代・食事代、 電話代、交通費を負担	
・差額：為替差損、クレジット利子	55,963円
計	4,591,603円

収 入

OB、関係者からの寄付金	331,500円
サファリ学割分返金	24,480円
	<hr/>
計	355,989円

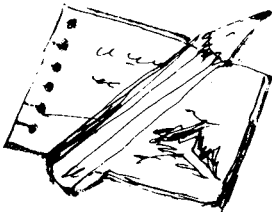
4,550,000	予算
-4,591,603	支出
+ 355,989	収入
計 314,386	

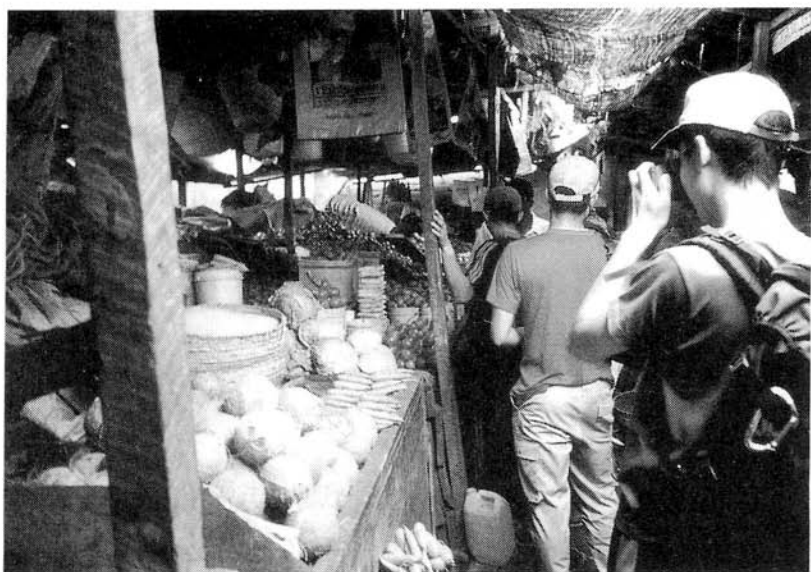
よって、現在のアフリカ合宿残金は報告書作成費20万を足して
残金 514,386円

以上の通り、アフリカ合宿会計の収支状況を報告致します。

1999年10月5日 アフリカ合宿会計 藤田 亮助

※ 尚、残金514,386円は全て報告書作成に使用しました





モシの市場でお買い物



独特な魚売り場

合宿総括・隊長・OBの言葉

アフリカ合宿総括

1. 総評

△ケニア山、キリマンジャロ山▽

ケニア山では未体験の高度の中で高山病に苦しみながら7人中5人が登頂し、高所登山の特性を体験することができた。そしてその時の経験を基に、キリマンジャロ山ではギルマンズポイントに全員登頂することができた。両山の最高点に全員が立てたわけではないが、高山病が個人の体質的なものに関係する以上どうしようもない部分もある。我々が準備段階から自分達の高所登山を考え、現地ですれを實行した上での結果である。やれる限りのことはやった上での結果であるので満足したい。

△自転車ラウンド▽

合宿主旨に則った思い通りのツーリングが行えた。野性動物を身近に感じ、現地の生活に積極的に溶け込むことで本来のアフリカの姿を見て、味わい、感じることができた。途中懸念された交通事故、強盗なども避け、満足行くツーリングを楽しめた。

全体を通し事故、病気といったものがほとんどなく最後まで全員元気で帰国できたことを評価したい。

各個人の自己管理が出来ていたものと思われる。

皆積極的に今回の合宿を楽しんでいた姿勢を今後も忘れないで活動を続けていこう。

2. 合宿前

●合宿地、計画内容の選定

海外合宿を行うことを決めたのが97年5月、部内の状態が先行きを見通せない状態（三年部員が抜け、新人が一人になるなど）にあったので計画を進めていく上で次の3点に焦点を置き準備を進めた。

①部の実力の見極め・・・

我々委員の実力、経験の範囲内で下級生と共に安全確実に活動できる計画を考え、一隊でケニア山、キリマンジャロ山に登り、その間を自転車で走破する内容に決めた。内容的には我々に相応のものから早くから納得していたので、後は長期の合宿経験が乏しいことが課題となった。これは夏合宿で三週間に及ぶ長期縦走を経験することにより自信をつけたこ

とで解決した。

時期は部の実力が最も安定する春を選んだ。現地の気象事情などとの関連も良く、新人勧誘に主力を注がねばならない現状の中では、この時期しかなかったであろう。

② 国内活動とのバランス・・・

アフリカ合宿前の国内での合宿がアフリカを意識したものになるのは当然のことではあるが、ワンゲルの魅力は海外合宿だけでなく、後代のことも考えると沢登り、ボートなどの活動も日頃のワンダリング、もしくは合宿で取り入れていきたかった。しかし、4月からの新人勧誘の成果が出ず、新人獲得に例年以上に時間を費やす必要が生じた事、またリーダー層の実力不足の為此の点はできなかったと言わざるを得ない。この問題は50代下半期の課題としてこれから取り組んでいきたい。

③ 委員がやりたいこと・・・

先にも述べたように計画立案時、進行時の部の状態が不安定かつ先行き不透明であったので、詰まる

ところ計画進行の決め手に大きく影響したのは委員が何を行いたいかであった。やるからには自信を持って後代を楽しませるのがリーダーの役割と考える今回合宿はどうであっただろうか。下級生の積極的な姿勢に助けられた部分もあるが、隊員全員が満足を得たことを確信している。

● 調査（現地下見）について

エージェントからは早くから下見の可能性を示唆されていたが、委員の方向性としてはギリギリまでその必要性を検討した後、どうしても必要である場合に調査に発つことにしていた。計画進行に伴い自転車Rの幕場の下見、現地情勢の把握が迫られたので10月に現地調査を行った。結果としてはこの調査を境にエージェントとの間との交渉も軌道に乗り、現地スタッフとの協力体制が築かれた。現地での運営、活動がスムーズに行えたのも調査により現地事情が把握できていたからである。やはり未知なフィールドで活動を行う場合、下見をしているかいかで事前の話し合いや現地での運営、対応に明らか

な違いが出る。下見をすることで本来のやろうとしていることに弊害が出ない限り（未知な部分を残しておく魅力や精神的な部分が大きいと思う）は現地調査は非常に有効であろう。特に遭難対策上現地の通信事情の悪さや生活リズムのギャップを経験しておくことは安全かつ確実な活動を求められる我々において必要不可欠なのではないだろうか。

● 新人宮城の不参加について

膝の故障により夏合宿不参加からアフリカ合宿に向けて調整を続けてきたが、症状の回復が進まず、アフリカでも満足な活動ができないと判断し不参加を決定した。本人にとっても部にとっても残念ではあったが、膝を治し今後の活動での活躍を期待する。

3. 合宿中

● 行動判断

ハケニア山RV

2月19日 C2のマッキンターズキャンプを小屋泊まりにする

↓ 高度4200mのC2から翌日のピークへ

のアタックは午前1時に起床し登頂後、2500mまでいっきに下るといふ少々きつい行程であった。又4200mという高度に疲労している隊員も多かったので万全を期す為、小屋泊とした。・頭痛で眠れなかったり1時起床で睡眠時間も短かったがアタックへ備え体を休めることができた。

20日 中島、長友はオーストリアンハットまでと

し。ピークまでアタックしなかった

↓ C2を出発し約1時間後、中島がペースダウンする。しばらくそのまま登り続けるが苦しそうなので長友、中島、中村OB3人を切離し、中島のペースで登らせる。

本隊とは約30分遅れでオーストリアンハット（4790m）に着いたがその過程で歩行が不安定になり、地面に横になり眠るようになり休憩するなど集中力を欠き弱っていた。小屋に着いた後、ガイドとも相談しレナナビーク（4985m）までの道も険しいことから

中島にはアタックを諦めてもらった。その際長友も体調を悪くしていたので二人で小屋に残り、本隊がアタックより戻るのを待って全員で下山した。

・ 無理をする必要もなく慎重で的確な判断であった。4790mまでは到達したことにより、後のキリマンジャロ山は5700mのステラポイント(キルマンズポイント)まで全員登頂できた。高度順応はできていたということであろう。

△自転車RV

2月23日 サガナ〜ナイロビでナイロビ近郊で行動

打切り、車で移動する

↓ ナイロビ近郊に近づき交通量が激しくなり、我々の走行が迷惑且つ危険と判断しサガナから89km地点で自転車での行動を打切り、伴走車で残りの行程を移動した。

・ 事前にエージェントとも打ち合わせておいたことで現地の事情に合わせる外仕方がない

25日 24日に引き続きナイロビ停滞日とする

↓ 計画では24日停滞し、25日から行動開始であったが1日では休養にならないと判断し、24、25日の2日間を停滞日とし休養、後半の準備に充てた。

・ ここで1日遅らせることで、計画では監督合流後翌日に入山であったキリマンジャロ登山も1日遅れ、監督の休養にも繋がる的確な判断であった。

日程の変更は早めにエージェントにお願いしたことでその後も問題なく進行できた。

28日 ナマンガ〜アルーシャで浅井体調不良の為

途中から伴走車へ収容

↓ 越境手続きに時間がかかりこの日は9時にナマンガをスタート。しばらくは全員まとめて走っていたが浅井が徐々に遅れ始める。理由は体調不良に重ね暑さによる体力消耗。気温も40度近くまで上がり、体力を奪われ非常に苦しい状況。ナマンガから68km地点で自

身の判断で自転車を諦め車で移動した。

・ 女性の体調不良は長期の合宿では特に辛い問題である。当日朝、リーダーは報告を受けていたので無理させず伴走車に乗ってもらったことにした。

△キリマンジャロ山RV

3月8日 4人だけによるウフルピークアタック

について

↓ 5896mのウフルピークには8人中4人が登頂した。後の4人は5758mのステラポイント(ギルバート)で引き返す。4人が下山した理由は高山病による体調の悪化でそれぞれ個人の判断によりウフルピークにアタックしないことを決めた。

・ 高度障害による体調の変化は個人差が顕著で、登れるか登れないかを個人に判断させたことに間違いはなかった。症状は浮腫により顔や手がむくれたり平衡感覚を失いフラフラ歩いたり、頭痛、吐き気と様々。

△その他▽

3月16日 中島の航空券チケット紛失について

↓ 15時40分のAI302便に乗るため13時にホテルを出ようとしたところ、中島から航空券チケットが見当たらないとの報告を受ける。すぐホテルの部屋をチェックするが見つからない。13時のバスが到着したので取り合えず空港に移動する。移動中のバスの中で荷物に紛れていないか再度調べるがないので、紛失したと確定し対処することにする。空港到着後、エアインディアのクレームセンターで「チケットを無くしたが乗れるか」と尋ねたところ「予約再確認済で搭乗の意思表示をしているので大丈夫」と返答を得る。しかしチェックインカウンターのスタッフに聞いてみると「私じゃ分からないからオフィスに行ってください」と言われる。オフィスに行くと「チケットを失くしたのでは乗れないよ。」と一蹴される。ここで道祖神のナイロビ支店へ電話を入れる。

(14時30分)。「チケットのコピーをファックスするのでそれをもとに交渉して下さい。」ということだったのでファックスを受け取りエア・インディアのジェネラルマネージャーへ直訴することに。ファックス待ちの間長友、中島以外の隊員の搭乗手続きが終わったので、中島が搭乗出来ない時は長友とインドに残り翌日以降の便で帰ることを伝える。合宿費の残りを受け取り、他の隊員とはここで別れる(15時)。

ジェネラルマネージャーのオフィスに行く
と本人が不在だったので秘書を通してチェックインカウンターのチーフに搭乗券を発行してもらえようお願いする。すると一度チーフの許可が下り急いでチェックインしようとしたところ、別なスタッフが異議を唱えチーフに許可の取消を迫ったので、そこで302便を諦めることになった。許可取消の理由は「セキュリティ上問題であるから」ということ。

結局チケットはどこかで落としたものと思われる。パスポートの次に貴重な航空券チケットを紛失したという大きなミスを反省すること。特に貴重品をジャージのポケットに入れておいたという杜撰な管理は上級生としてリスクコントロール能力に欠けているとしか言いようがない。
日頃からの心掛けを改め、信用の回復に努めること。



4. 各学年評価

● 新人（栃谷）

高所でも体調を崩すことなく両山のピークに立ち、自転車でも安定した走りを見せており、本人にとっても今回の合宿は大きな自信になったことと思つた。合宿前より独自の準備、スクーリング等積極的に活動に取り組み、その姿勢を1ヶ月間最後まで持続できたことも高く評価したい。ただ、装備に関しては4月から二年になる者として非常に不安である。個装の管理が下手であり、意識が低いようなのでその点を日頃から意識し訓練する必要がある。山の世界において装備の紛失などは生死に関わるミスとなることを肝に命じて欲しい。

4月からは二年となり、新人指導、係り活動等部の原動力となる訳であるが持ち前の個性と確かな実力で新人を魅了する二年になるよう期待したい。

● 二年（中島）

合宿前より係活動、新人指導といった役割を十分果たしてくれた。パーティ内での自分の役目を状況に合わせて考えられる力が備わっていることは頼もしい。4月からは三年になりリーダー層としての責任が強まる中で、下級生と共に安全に活動して行く為のリーダー力を着々と身につけてもらいたい。信頼と豊かな人間性により後輩を魅了するリーダー目指して自己を鍛えよう。

チケット紛失に関しては猛省し、危機回避・リスクコントロールといった面での意識、姿勢を身につけること。

● 三年

海外の地で1ヶ月間の長期合宿を無事運営できたことを自信にしたい。先に合宿中の行動判断を挙げたが、行動中の要所要所での判断も適切であった。しかし、合宿中、中島より指摘があったように、下級生とのコミュニケーションのとり方において、最

上級生らしからぬ場面が見られたことを反省するべきである。言葉にしなくても、声にしなくても分かるだろう的態度は何が分かっていて、何が分かっているのかを把握出来ず、非常に危険な状態を生む。

確認すべきことは確認し、パーティ内の意思の統一を図ることはリーダー層の義務であり、安全でまとまりある活動につながる大切な要素である。その点を再度確認したい。

いよいよ4月から最後の学年ということで、今回の合宿で得た自信と指摘された反省点を生かし、我々の魅力を持って50代下半期を引っ張っていけるようお互いの人間性の研磨に努力したい。

最後に

今回の合宿は、平成9年5月より計画を打ち上げてから非常に多くの方々のご指導、ご協力の下で成功することができました。ケニアで幕場を提供していただいた仲又氏、株式会社道祖神の三輪さん、築地さんには多大なご協力をいただきました。誠にありがとうございます。

また我々の計画に的確なアドバイス、ご指導をいただきました監督・コーチ、そしてOB・OGの皆様本当にありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。

△合宿遂行にお世話になった全ての方々には感謝し総括とします。

50代 委員会



創造するワンダーフォーゲル

—— アフリカ合宿をふり返って ——

隊長 中村 圭司

部員数の減少と総合力の低下を言われる中で、アフリカでの海外合宿を実現できた。以下いくつかの点についてふり返ってみることにする。

一、ケニア・キリマンジャロ登山をめぐる

ケニア山で4000mを越えて、キリマンジャロに登る計画は方法として最適に見えたとし、ケニア山にはすんなり登れる気がしていたが、実際にはそうはいかなかった。ケニア山登頂予定日の前日、宿泊地に到着した時点で隊員の多くが疲労のため寝込んでいたが、明らかに高山病の症状によるものだった。高度順化の理想としては、キャンプ地に到着してもすぐにシュラフに入らず、周囲を散策したり活動するのが良いし、できたらずより高い高度まで登り戻ってくるとさらに良いと思われる。けれど、多くの隊員にはそうした余裕がなかったようだ。疲労回復のため睡眠することは、

高山病についてはマイナスになることもある。予防として深呼吸を繰り返すことがいい方法だが、横臥した状態は胸部の運動が制限され呼吸が浅くなるし、根舌の沈下によって気道を狭め酸素不足を招くと言われている。隊員を強制的に起こすこともできたが、正直なところ無理なことだと思われた。

私は常にそうするように少し高度を上げようと小屋を出て散策にかけた。浅井と中島は散策を終え戻ってきていた。二人は私と共に小屋の周囲の急斜面を登ってみると言う。中島は途中で引き返した。すでに高山病の初期症状が現れていたと思う。100mくらい登った。理由は知らないが、「私、今回は絶対に登りたいんです」と浅井はつぶやいていた。おそらく参加した隊員の中で最も体力的に劣ると思われた彼女は、それをよく自覚し、慎重に行動し、私が事前にアドバイスしたこと（すぐにシュラフに入らず周辺を歩いてみたりする）に真面目に取り組んだことで、最もすんなりと登山活動ができたのであろう。ケニア・キリマンジャロ山とも登頂できた隊員は共通していた。高度

を苦手とする者とそうでない者が体質的に存在する以上、この結果は当然のことかもしれない。私たちは日本で生活しているので、事前に4000m級の山で訓練することもできない。また日程を工夫し停滞日を作ったり、一度高度を下げることも可能だったと思うが、それがプラスになるかは分からない。欧州から来た登山家には実際にそうしたことをしている人々もいたようだった。

キリマンジャロ登頂後は全ての隊員に何らかの影響がでていたが、最も少なかったのは唯一の女性隊員の浅井だった。女性は一般に高山に登るには体質的に不利な面があるが今回のメンバーの中では最も高所に適合していたのだろう。キリマンジャロでのポーターたちの間では、このマサイ族と似た名前の女性の強さがひとしきり話題になっていたとか。

二、環境登山とワンゲル

ケニア山ではそれほど気にならなかったが、キリマンジャロではゴミの多さと生木の伐採があまりに多いことに驚いた。この状態の原因は、明らかに登山者が

多すぎることである。

今回私たちが歩いたマチャメルートは、登山者が少ないと言われているがそれでもこの酷さである。毎年何万人もの登山者を迎えるマランゲルートの荒廃ぶりは想像に難くない。山の環境を守る一番の方法はそこに立ち入らないことであろう。にもかかわらず登山者は、山に入ってある種の満足感を得たいと思っっていると同時に山をめぐる周辺の環境がいつまでも変わらないうでいてほしいと思っっている。様々な試みがなされているにもかかわらず、問題は解決に向かっていないわけではない。キリマンジャロに関しては、このまま続くと切るべき薪がなくなり、周辺にはゴミの山が溢れるという日が近いと言わなければならない。

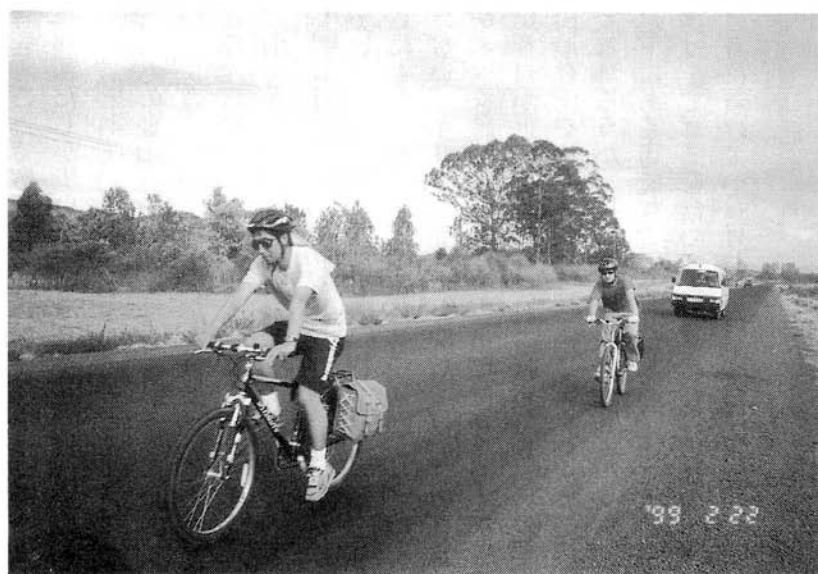
環境登山をめぐる問題は今後登山者に様々な影響を与えるだろうが、私たちとしては“貧者の一灯”として足下にある可能なことからはじめ、山に入った時の荷物は全てゴミを含めて持ち帰るだけの体力と知性だけは身に付けていなければならぬ。

三、自転車ラウンド —— 創造性と安全性 ——

「そりゃ旅行やなあ」今回のアフリカ合宿での概要を話すとF氏はこう言った。F氏がかつての職場の同僚で、パキスタン・カラコルム山脈へのヒマラヤ登山を伴にした人だ。優れた登山家であるF氏は、同時に通算四年間もの間アフリカに滞在し、最近それをまとめた本を上梓した。ケニア山、キリマンジャロ山とも何度も登っており、私たちが活動する周辺は手に取るように分かっているようだった。

F氏が「旅行やなあ」とつぶやいたのはケニア山とキリマンジャロ山の間を伴走車をつけて自転車で走る話をした後だった。彼によれば、あの辺の道路はほとんど舗装されており、まったく困難ではないということ。周囲に何もなく見通しがいいので、自動車は100 km以上で走っているが、偶然事故に会う可能性は少ないということだった。実際彼の言うとおりだった。

ヒマラヤ登山も旅の一つの形であるというF氏にとって旅と旅行は、明らかに異なるものなのだろう。今



回に限らずワンゲルにおいて海外合宿を自転車で活動する場合、伴走車を付けていることが多いが、それは安全性を高める目的でなされている。海外での活動の場合、活動中のトラブルよりも強盗、誘拐、殺人などといった人的被害に遇う可能性が少なくなく、伴走車を付けることで、現地の人々を同行者とすることは多くのメリットをもたらしてくれる。ガイドとなった彼らは、キャンプ地での交渉やトラブルを防ぐ上でも、重要な役割を担うことになる。今回の様に荷物の大半を車に積み込み、必要なものだけを自転車のバックに入れて行動するとなるといよいよ負担はなくなる。後はひたすら自転車を漕ぐのみだ。

F氏によって書かれた本の現在のキリマンジャロ登山に対する記述から想像すれば、登山や旅には非日常的な偶然性があり、多くの場合旅行にはそれがないと言っただろう。かつて経験した修学旅行というものがそうだろう。誰かが敷いたレールを歩くが如く、風景は変わっても教室にいるような感覚とでも言うのか。今から十年以上も前に35代の大家OBが中国合宿の続きとして、リュウエンからピキスタンへ至る

3000kmの自転車での一人旅をしたことがあるが、途中バスを使用せざるをえなかったとしても素晴らしい活動だったと思う。あれから何年も経つが、あれ以上の自転車での活動をしたワンゲルの人々を私は寡聞にして知らないのだが。

四、終わりにいくつか

ワンゲルでの海外合宿は、全員参加を旨とする以上実現すること自体に困難が伴う。いつの時もワンゲルは国内での充実した活動を理想とする人々がいる。そしてそれはどちらも正しいからうまく折り合いがつかなければ実現できない。今回はワンゲルの海外合宿の中で最も少数のメンバーで実現したものだだったが、チームとしてうまく機能し、「スモール・イズ・ビューティフル」な合宿だった。

今回6000mに近い高度を経験したが、今後の海外でより以上の高度を目指すことが目標となる可能性もあるが、理由の説明はしないが、それはちょっと違うかなとも思う。おそらくキリマンジャロの高度は追求する限度とも言える。

単に海外旅行にでる人たちは毎年増加し、メディアでもこれまで秘境の類に入っていた地域が紹介され続けられている。海外遠征の持つロマンティックで開拓者的なイメージはもはや過去のものであろう。海外だと特に構えずに国内での活動の場を海外に移してやていくくらいの気持ちの方が良い。もちろん要求される条件は異なるが、どこへ行っても發揮できる力を身に着けることが先決だ。日本の山野での活動の創造的展開として海外合宿を実現していくのが望ましい。

モリス・エルゾーゲの『処女峰アンナプルナ』が好きだ。この人類最初の8000m峰登頂の物語は、当時のヒマラヤ登山が地域探検からはじめ登山ルートの研究から登頂への過程を何年も費やしてなされた時代にあつてこの全てを一回で行い達成されたものだった。登る山すらアンナプルナかダウラギリか決めていなかったこの登山は、今日のフランスでの登山家に対する社会的意識の高さや冒険的活動についての彼らの哲学に強い影響を与えているのだろう。

私は大きな山行や海外遠征での失敗の時にいつも思い浮かべるのはこの本の次の様な言葉だ。

「人間にとって、理想というものは達しようとする努力ながらも、けつして達しえない目標である——
アンナプルナ、我々が何一つ報酬がなくとも行ったであろうアンナプルナこそ、我々の生涯の残りを生きる宝なのだ。この実現によって一ページがめくられ新しい生活が始まる。人間の生活には、他のアンナプルナがある。——」

『処女峰アンナプルナ』より

M. エルゾーク 近藤等訳

今回アフリカでの時間をともに過ごした諸君には、この実現にとどまることなく、新たな人生の宝を見つめるべく前進して欲しいと思います。



アフリカ合宿に寄せて

27代 三廻部 秀男

97年の秋に、長友・徐・藤田・浅井の4名が、2年生で49代のリーダーとなり、99年の春にケニア・タンザニアを舞台に合宿を行うことを目標に掲げた。1学年上が一人もいないことに加え、深刻な部員減少の中での海外合宿には、不安があった。部は海外を目指す状況にはなく、もっと足下を固める時期ではないのかというものである。最終的に、厳しい状況ではあるがアフリカ合宿実現を活動の中心にすえ、それを成功させることで、部を活性化し、部員減少の歯止めとしていくことをめざした。

ナイロビのアメリカ大使館爆破という予期せぬ事件もあったが、合宿を行う上での支障にはならないということ、治安問題がクリアーでき、細かな点を除き計画自体は、おおむねスムーズに推進されていた。隊長には、37代の中村圭司君が、早い時期から計画に強い関心を持ってくれ就任を快く内諾してくれた。中村君は、卒業後、社会人山岳会に入り、剣岳を中心に山岳活動を続けてきた山の現役であり、

ヒマラヤ遠征での高所経験もあり、標高5895mのキリマンジャロ登山を含む、今回の合宿には最適の人材であった。本人は黙っていたが、合宿参加により仕事を続けられなくなり帰国後、しばらくの間失業の身になっていた。

合宿の詳細な内容は、報告書に任せるとして、帰国した長友達リーダーに報告会等で何度か会う機会があった。彼らの表情や言葉から、アフリカ合宿を成し遂げた充実感とそこからくる自信とを強く感じることができた。このことだけでも、この合宿が確実に大きな成果をあげたと言ってよいのではないか。現役は、アフリカから帰った直後の新人募集で、12名という多くの新人を迎え、現在、南アルプスでの錬成合宿を終え、九州・西表島での夏合宿準備に向かっていると聞いている。私は、昨年(98年)の秋まで監督として現役の活動に関わってきた。94年夏のモンゴル合宿以後、部員減少に悩みながらも各代は活動に進してきた。49代リーダー達がアフリカ

合宿実現にむけ計画立案・資金調達に奔走する姿を
間近に見てきた。ここにアフリカ合宿がほぼ計画通
り実施され、また多くの新人を迎え、部の活性化が
進んできていることを、頼もしく思っている。昨年
の秋、アフリカ合宿間近の難しい時期に、監督を引
き継いでくれた35代の佐藤君やコーチ陣には感謝す
るばかりであるが、少ない上級生で多くの新人を、
以下に育てリードしていくか等今後の課題も少なく
ない。

アフリカ合宿成功を喜ぶとともに、今後の現役の
さらなる健闘を、創部50年の伝統に新しい発想を取
り入れた魅力あるワンダーフォーゲル活動が展開さ
れていくことを、期待している。

(1999. 7. 1 記)





マサイ族の戦士と



柔道を披露する藤田と中島



ケニア山の風景



徐, 栃谷のセクシーショット (?)

計
画
実
現
ま
で



（ア）ニエト海段。又、海前に入つて
朝陽ニ沿ひてあり Breach wall.

計画成立までの推移

50代委員が海外合宿に向けて始動したのは平成9年5月、私たちが二年生になった直後であった。当時の部の状態はというと三年部員が春合宿後に退部し四年生と二年生のみという過去にない状態であった。私たちにとっては、この先部はどうなるのだからと漠然とした不安を感じ、自分たちの経験・実力不足に焦りを覚えたことは否めない。四年生が卒部、卒業したら自分たちが部を運営することになるのか。いやそんな力はまだない、どうしよう。しかし、上がいいことで自分たちのやりたいことが出来やすくなるのではないか。では、何をやりたいのか！

私たちはまだ部を運営することがどういうことなのか見当もつかない頭で、とにかくこれからのビジョンを持つととうと四苦八苦した。これからワンゲルはどうなっていくのか、私たちは何をしたいのか。それから話合いを重ねた結果、二代分の代が執れるのであれば海外合宿をやりたい。今から準備していけば十分間に合う。そして海外合宿を終えた後は国内活動を充実させ、海外と国内でメリハリある活動をこれから行っていきたいという結論に達したのであった。



アフリカ合宿までの道のり

平成 9 年

- 5月 二年の間で海外合宿の話が本格化。行きたい国、地域などを語る。
- 6月 二年4人の話し合いでアフリカ（キリマンジャロ山）に落ち着
が新人より他の地域も探りたいとの意向を受け、調査期間を置く。
その後の検討で全員賛成の上アフリカに決定。
- 7月 資料収集、資料請求開始。ケニア政府観光局訪問。
各自調査担当決定。時事問題・歴史→長友、治安→藤田、気象→
浅井徐→病気、言葉→中島、食文化→華田、生活習慣→伊藤、
社会経済→久島。
- 8月 計画草案を監督、コーチに届ける。
- 9月 新人三人退部。
- 10月 海外資金積立ての口座開設（第一勧業銀行）。
旅行会社、エージェント探し開始。資金積立て開始。

平成 10 年

- 1月 道祖神オフィスを訪問。エージェントとして仮契約。
- 2、3月 バイト期間；目標金額10万円。
- 4月 富士山ワンダリング（2名）。
- 7月 二次計画書発行。
- 8月 バイト期間；目標金額16万円（実技代含む）。
富士山ワンダリング（2名）。
- 9月 常任理事会出席、合宿内容説明。富士山ワンダリング
（高所訓練、全隊員）
- 10月 アフリカ調査（1名）、その後道祖神と正式に契約を結ぶ。
- 11月 黄熱病予防接種。
- 12月 資金見積り確定。

平成 11 年

- 1月 最終計画書発行。破傷風予防接種。
- 2月 結団式。アフリカ合宿出発。
- 3月 帰国。
- 5月 OB総会にてOBへの報告会を行う。
- 11月 合宿報告書を発行し、アフリカ合宿を締めくくる。

アフリカ合宿調査計画

- 目的
- ・自転車ラウンドの幕場最終決定
 - ・計画上の諸手配、交渉（バックアップカー、警察官等）
 - ・現地事情の把握（治安、気候、物流、e t c.）

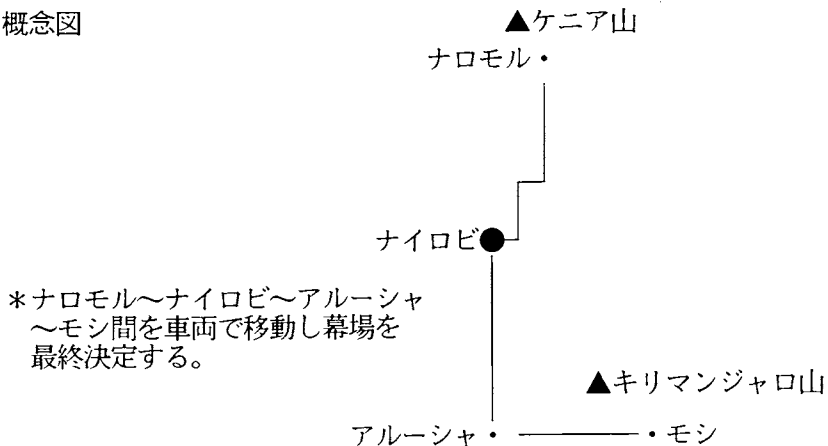
期日 1998年10月25日～11月4日

調査人 長友

費用 30万弱

日程		備考
10/25	東京＝ボンベイ	出国、乗換
26	ボンベイ＝ナイロビ	入国
27	ナイロビ～ナロモル	自転車ラウンド幕場下見
28	ナロモル～ナイロビ	〃
29	ナイロビ～アルーシャ～モシ	〃
30	モシ～アルーシャ	〃
31	アルーシャ～ナイロビ	〃
1	ナイロビ	現地スタッフとの交渉
2	ナイロビ＝ボンベイ	出国
3	ボンベイ＝東京	乗換
4	東京着	帰国

概念図



アフリカ合宿調査報告（1998年11月9日報告）

今回の調査では目的、調査項目等全て達成できた。以下に細かく見ていく。

目的 1. 自転車ラウンドの幕場予定地の下見

2. 計画上の諸手配、交渉、見積り催促（バックアップカー、人件費等）

3. 現地事情の把握（治安、気候、物流、e t c . ）

1. について

交渉中のカジヤド、ナマンガのリバーロッジ以外は全て視察出来た。

- 仲又邸（ナイロビ） → ナイロビより約20キロ離れたアチ・リバーという閑静な所にある。ナマンガに通じる道の途中。庭はテントを張るには十分な広さ。家の中を使わせて頂くことも可能。シャワー、トイレ使用させて貰える。アスカリ（ガードマン）付き。仲又さん滞在。
- ナロモル（リバーロッジ） → 幕場からケニア山見える。トイレ、炊事場完備。敷地内にバンガロー有り。使用可。一人当たり200k s l。テニスコート、プール、バレーボールネット有り。
- サガナ（カヒンディさん宅） → 小さな街ではあるが、食べ物には手に入る。カヒンディさんのお宅は訪ねられなかったが、三輪さんの調査報告にある通り。夕食、朝食共に、カヒンディさん宅が作ってくれるが自分たちも日本食を作って交流するのが理想。
- カジヤド → まだ確定はしていないが、マサイ族の村。住居はわりと多い。街としては、一応の食べ物は手に入る。
- ナマンガ（リバーロッジ） → リバーロッジそのものは見れなかった。しかしナロモルのそれと同じと考えて良い。ナマンガの街は人も多いし、食物も揃う。
- アルーシャ → 大きな街。何でも揃う。カードによるキャッシングや両替可。幕場は「マサイ・キャンプ」というキャンプ場。治安、水、トイレ等問題なし。キャンプ場内で食堂もある。
- モシ → 大きな街。カードによるキャッシングや両替可。幕場は「ハニー・バーガー・H」。治安、水、トイレ問題なし。ホテル（家のような）なので部屋も使える。

2. について

バックアップカー、ガイドがどの日にどの程度必要なか決めた事により、バックアップカー、人件費（ガイド、ドライバー）の見積りはすぐ出る。キリマンジャロ登山についても、アレンジしてもらった会社のマネージャー（Mr. ポール）と協議。結果、マチャミルートで登り、ムエカルートで下る5泊6日の行程で合意。この行程は登頂率95パーセントの高確立。またキリマンジャロに登るのに一番美しいコースということだ。アイゼン、ピッケル必要なし。高山病でリタイアした者はガイドとポーターが宿泊場所まで連れて行ってくれる。

3. について

ナイロビの地理・・・イギリスの植民地時代に都市計画に基づき区画整理されて築かれた街なので非常に分かりやすい。我々が現地でお世話になる道祖神事務所、日本大使館や大きな銀行、スーパーマーケット等はどれも隣近所にあるので便利。

気候・・・・・・・・・・今回の調査中一度だけ夕立が降った。それ以外は晴天。調査中は一度も長袖を着ることはなかった。合宿本番は夏なので更に暑くなる。

自転車ルート・・・・・・・・ナイロビ～ナロモル間の方がモシ方面に比べ道が広くよく整備されている。全体の八割五分はアスファルト。それ以外は砂利道。路肩は土で歩道になっている。現地人も自転車に乗ってよく通る。現在アスファルト化の工事が進行中で本番時には更に整備されているはず。アルーシャなどでは路側帯に日本と同じブロックがある。峠もなく、高低差もない平坦な道である。気持ち下り気味の道が前方に果てし無く続く。持ち下り気味の道が前方に果てし無く続く。

治安・・・・・・・・・・夜出歩かなければ問題なし。初日にホテルでお金を盗られたが旅行者が狙われる事実はある。合宿行程中の幕場は全てセキュリティがしっかりしている。ルート場も強盗が出たりするような雰囲気ではない(昼間は)。後はいかに自衛に徹するか。日本と同じ感覚でいると盗難に遭う確立は高い。

各係

●装 備

- ・仲又邸装備デポについて
エスパース1式 (No.9)、コッヘル大・大、ビニシ5枚、ペグ20本、ローソク2、蚊取線香3箱、を預かっていただいた。
- ・ガスカートリッジの確認について
カートリッジはインターナショナルC206が主流。というかこれしか見なかった。それに伴いヘッド購入。火力も問題なし。
- ・装備購入場所の下見について
ナイロビで登山用品店有り。しかし誰かが忘れ物をしたり、装備を破損したりなどしない限り行く必要もない。必要な装備は街のスーパーで手に入る。
ナクマツト→日本の「オリンピック」のような店。ヘッドはここで購入。
カートリッジもここにある。オレノコもここで買える。
MTBや自転車も売っている。
ウチュミ →ここでも七輪や工具揃う。
- ・エアーインディアの自転車の取扱について
機内預かり荷物と同じ扱い。輸送した際デリケートな部位（ディレイヤー等）を保護し、「自転車により取扱注意」とステッカーを貼れば問題なく輸送してくれる。
- ・その他
ケニア山、キリマンジャロ山登山はストックが必携。装備にストックを加える。
街乗り自転車の修理屋はいたる所にあるが、MTBは扱えないとみた方がいい。

●気 象

- ・気象予知手段を調べる
現地の朝の新聞で大雑把な天気予報はある。(25ks1)
ラジオでの天気予報は以下の通り。
AM: 612(バンド)で7時、18時、19時にニュースの後天気予報あり。スワヒリ語。

747(バンド)で7時、9時、13時、16時、19時にニュースの後天気予報あり。英語。

短波；17810(バンド)で7時～8時にかけて日本からの情報。日本語。

・その他

観天望気は役に立つが、それよりも気象係はラジオの天気予報を聞き取るヒアリグを鍛えた方がいい。日本のように天気は目まぐるしく変化しない。モシ、アルーシャなどは午前中曇り、午後晴れるというパターンが多かった。

・今後の課題

ケニア山、キリマンジャロ山の気象について研究し部員で予備知識を持つ。

●食料

・食料買い出し場所の下見

「ウチュミ」「ナクマツ」の2つを使うことになる。日本のオリンピックと三徳が合わさったような店。何でも揃う。特にウエストランド地区の「サリットセンター」内のウチュミがナイロビー大きい。ここには八百屋や果物屋なども揃っている。また銀行、郵便局、レストランも有る。

・その他

日本でお馴染みの野菜は全てある。今回、各幕場で食料が手に入ることが分かったので、ナイロビでの買い出しは必要最小限でいい。現地の米もまったく美味い。値段は5和=700ks1(約1400円、カルフォルニア米)。ナイロビの日本人倶楽部で日本の調味料は入手可。2倍～3倍の値段。キャンプサイトによって焚き火を禁止される可能性があるので七輪と炭で調理した方がよい。七輪、炭共に安価。

・今後の課題

現地の食べ物をどう活用していくか。食生活の変化は体調管理や栄養面で軽視できないのでバランスを考える必要あり

●医療

・マラリア予防薬購入

現在薬によっては抗体ができてしまった物があり、メフィキンを紹介し

てもらった。週1回1錠飲む。1箱4錠入りで650ks1（1人分）。

- 器具類購入の可否

大体購入できるが、医箱は日本で作っていった方がいいと感じる。たいした重さにもならないと思うので。

- その他

頭痛薬や風邪薬、その他の種の薬は全て購入可。しかし使い慣れた日本の薬の方が信頼性、効き目などあるだろう。虫除けスプレーは現地購入が良い。買い出しはナイロビのみで行うべき。

- 今後の課題

ナイロビで購入する物のリストアップ。

●その他

- マチャミルートの詳細について

登山ルートと下山ルートを確認した。マラングルートはだらだらした登りなので登山経験者にはマチャミルートの方が登りやすい。また登山ルートの中で一番景色がよくベストなルート。全てテント泊まり。ガイド、ポーターと一緒に食事を作る。8人パーティだとガイド2人にポーター16人がつく。これは登山する時の原則。リタイアした者をガイドとポーターが宿泊場所まで送ってくれる。危険箇所なし。氷河が残るが遠くに見ながら巻く。アイゼン、ピッケル必要なし。下山時はムエカルート。登頂後、ムエカハット（テント）で1泊し、翌日アルーシャまで帰る。

- 仲又さんと緊急時連絡体制の確認、お願い

快く承諾いただきました。連絡網も現行のものでよいということです。

- 電話の使い方、かけかた確認

日本と何も変わらない。1、10シリング硬貨を使用。2シルで3分間通話できる。テレホンカードもある。特にタンザニアではテレホンカードを購入しないと電話できない。街中ではよく壊れていて使えないものも多い。

- 現地スタッフを本気にさせる

これは、何も本気になっていない訳ではなく、見積りを出すにしても出すに必要な事柄が分かっておらず、我々の連絡を待っていたということ。我々には、見積りを出すのに必要な事柄が分かっていないという連絡は

入っていなかったもので、現地と我々との在京のエージェントで止まってしまっていた。仲介者を通して話し合う弊害がでてしまった。今回の調査で全てははっきりさせてきたので、今月中には予算確定する。

・持っていくと役立つ物

現地でお土産の際やお土産で喜ばれるのは、ボールペン（3色、色つき、派手等）、ソーラー電卓、カレンダー（日本の柄、デザインが人気）、時計（壊れていてもアクセサリとして使う）などである。いくつか持っていくと、物々交換やお礼などに役立つ。調査中も3本のペンを現地の人にあげた。

・仲又さんからのアドバイス

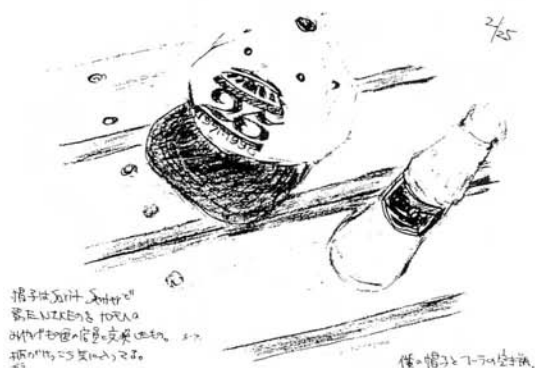
仲又さんのお知り合いで薬科大学山岳部OGでキリマンジャロ登山経験者（池袋にて薬局を開いておられる）を紹介して下さい、薬学の専門家から見たアドバイスを今後いただくことになっている。

・GPSについて

調査に携帯していく予定であったが、調査前にGPSの機能と現地での必要性をを検討した結果、必要ないと判断したので調査時も使用しなかった。結果としても合宿本番で使用するメリット、効用等はない。よって本番でもGPSは使用しないこととする。

以上

報告者；長友 慎治



ケニア山ルート詳細

(現地ガイド集より抜粋)

ナロモルルート往復

ケニア山登山の中でナロモルルートはピークまでの最短ルートで、今日で最もポピュラーなルートである。そのルートが短くあっという間に山頂から下山するので、高山病やその他の高所に関連する病気にはなりにくい。病気になる前に下山するからである。

初日 (3～4時間) 2500m→3050m

ナロモルリバーロッジから約20km離れた国立公園入口まで車で移動。登山口からナロモル川の支流に挟まれた尾根にそって森の中を8km程登っていくとメットステーション(3050m)到着。公に認められた車のみここまで入ることができる。ここではキャンプサイト、水、セルフサービスの小屋の施設等利用できる。ここでC1。テント泊。

2日目 (6時間) 3050m→4200m

始めは大型車が通れるほどの幅広い道が続く。ポリス・シグナル・ステーションを過ぎる辺りから登山道が険しくなってくる。そして道も狭くなりながら稜線へと続く。メットステーションから稜線に上がるまで約1時間。しばらく険しい湿地帯が続く。道は開けた高原地帯を抜けるまで稜線の南面に沿って続く。そしてメットステーションから約4時間で尾根を突き上げ、眼下にテレキ峡谷を望む所までくる(4000m)。そこからは峡谷の南側に沿ってトラバースし、徐々に川底へと高度を下げる。更に谷沿いにしばらく歩けばマッキンターズキャンプ(4200m)である。ここにはキャンプサイト有り、小屋の管理人もいる。テント泊。

3日目 (10時間) 4200m→4985m→2500m

真夜中の2時に起き、3時に出発。懐中電灯で足元を照らしながらガレたジグザク道を登る。3時間程でオーストラリアンハット(4790m)に到着。さらに氷河の端を1時間程登るとレナナピーク(4985m)である。朝焼けに輝く360度のパノラマを楽しむことができよう。それからの下山は速い。マッキンターズキャンプまで1時間半で下り、朝食を取って下山の準備をする。ここから4時間程でメットステーションへ来た道を下る。後はリバーロッジまで日が暮れる前に帰り、ゆっくりと体を休めよう。

キリマンジャロ山ルート詳細

(現地ガイド集より抜粋)

登り；マチャミルート 下り；ムエカルート

マチャミルート

マラングルートが通称「ココ・コーラルルート」と呼ばれるのに対し、マチャミルートは「ウイスキールート」と呼ばれている。それは、マチャミルートで登頂の方がより価値があり、素晴らしい景色が得られ心酔できるからである。一般的に登山道として使われることがほとんどでルートとして高度順応に適し、景色もいいことで知られている。マチャミ、モシ、バランコ、バラフとゆっくり高度を稼ぐこのコース取りが登頂率95%という高確立を得られる理由。

初日 (5～6時間) 1920m→3000m

ハニーバーガーロッジ(モシ)で朝食を済ませ、マチャミゲートまで25kmの道のりを車で移動。標高約1920m地点にある赤ペンキマークから登山スタート。道すがらブルーモンキーを見ることが出来る。登山道は雨林の中を曲がりくねりながら続く。見晴らしのいい道の途中で弁当を食べる。標高約3000mの低木帯を抜けるとマチャミハットである。小屋の50m西にトイレは有り、小屋から5分下った所にある小川で水は豊富に採れる。小屋は修理されておらず、荒廃している。小屋の東側にいい幕場が有る。テント泊。

2日目 (4～5時間) 3000m→3800m

マチャミハットから小さな峡谷を越えて行くと、登山道は長く急勾配の稜線へと続く。その稜線からは、キボ峰、マウエンジ峰、シラ峰とキリマンジャロ山の三つのピークが見渡せよう。また天気がいい時にはメルー山までも見ることが出来る。標高約3500m地点で尾根が西へ折れるまでは、岩の稜線も低木の灌木帯も容易に登れる。そこから西へさらに登り続けて行くと徐々に3800mのシラ台地に近づく。シラ台地から30分でシラハットである。この高所ではカモシカを見ることが出来る。小屋から5分程登った所の小川が水場。シラハットは古く、汚いので大抵のパーティはクレーター(ほら穴)の傍もしくは中でキャンプする。テント泊。

3 日目 (5~6時間) 3800m→3900m

小屋からキボ峰へ向けて東へ登り続ける。間もなく行くと、大峡谷へと下りていくルートと北キボ巡回コースとの合流点に出る。ここから別名「鮫の歯」とも呼ばれるラバ・タワーを見ることができる。南面の氷河を過ぎ、そのラバ・タワーの手前でバラコハットへと道がそれる。バラコハットの標高は約3900m。小屋は金属でできた汚いシェル。テント泊。

4 日目 (6時間) 3900m→4600m

バラコハットから次の幕場のバラフハットまで更に登り続ける。高山砂漠が広がり周囲は何もない。それでも独自の美しさを残している。このぐらいの高度になるとごくわずかの小さな高山植物しか生きていけない。ウフルピークが時々姿を表し間近に感じることが出来る。バラフハットは大きな尾根の東側に位置する。テント泊。

5 日目 (15時間) 4600m→5896m→3100m

山頂に向けて午前2時に出発する。道は岩場でやや険しくなるがさほど苦しむこともない(ガレたりゴツゴツとした道、道幅が広いので問題ない)。途中氷河を巻きながら登りつづける。小屋を出て約6~7時間でアフリカ大陸最高峰5896m。登頂後5681mのギルマンズポイントへ下る。下山はムエカルート。ごつごつした岩の道。ムエムエカハットは南東に5分下った小川で水が採れる。テント泊。

6 日目 (5時間) 3100m→1500m

低灌木の生えた高原地帯を抜け、雨林の間を下山口までひたすら下る。足場はぬかるみが多く、泥だらけになり滑りやすい。下山後、車でアルーシャまで移動。自転車Rで使ったマサイキャンプに戻り、疲れを癒す。



アフリカ合宿における高所訓練・ 高所順応の位置づけ

我々が2月から3月にかけてケニア山、キリマンジャロ山に登るために何が出来るか、いつ高所順応を行えばいいのかを、日本山岳会指導委員会指導委員長の松原尚之さんにお聞きした。

- ・高所順応で一回体が順応してもつのは、約一ヵ月と考えていい。
- ・2月に登るとなると、1月に高所順応するのがいいのだが、1月に富士山に登るのは無理。
- ・順応がきれてしまっても、一回高山病を体験しておく方が絶対いい。また一回順応した体は、次に順応しやすい。
- ・我々の場合、9～10月に富士山の山頂、もしくは八合目あたりで1、2泊するのがよいだろう。
- ・下界では、心肺機能を高めるトレーニング、最大酸素摂取量を増やすトレーニングをするのがよい。

以上が、松原さんの回答から得られた要点を整理したものだが、我々の高所訓練、高所順応の目的は以下の三つとする。

- ・高山病を一度体験することにより免疫をつける。
- ・一度順応することにより、現地での次の順応をしやすい体にする。
- ・高所登山に対する全部員の意識の向上。

よって、我々の高所順応、高所訓練の行い方は、松原さんからの回答と我々の目的を照らし合わせ、

- 9月から10月にかけて全員で富士山での高所順応を行う（1、2泊）。
- 下界で心肺機能を高め、最大酸素摂取量を増やすトレーニングを行う。
- 各人で富士山でのワンダリングを企画する（希望者）。
- 遭難対策係、トレーニング係を中心に、高所登山に対する知識面でのアプローチを行い、部員の意識向上、雰囲気作りを行う。

ことにする。

これまで検討を行った結果、我々がアフリカ合宿前に行うべきことは以上まとめた通りである。また先に挙げた四つの事項をしっかりと行えば十分に現地でも対応できると判断した。よってこの四項目を我々の高所訓練としてこれから行っていく。

98年4月15日
49代委員会

所持資料リスト

- ・ケニアの地図（1／50万、1／130万、1／150万）
- ・タンザニアの地図（1／50万、1／190万、1／200万）
- ・ケニア山ルート地形図（1／5万）
- ・キリマンジャロ山ルート地形図（1／5万、1／10万）
- ・地球の歩き方 東アフリカ
- ・岐阜女子大学WV創部25周年海外遠征報告書「山の娘第10号」
- ・観光文化資料館にて関連記事、書類コピー多数
- ・ケニア政府観光局にて関連書類、パンフレット多数
- ・インターネットによる関連書類、記事多数
- ・アフリカサファリツアービデオ
- ・キリマンジャロ登山の写真数枚
- ・高所登山に関する研究書類、関連記事
（山溪、岳人、28代石井OB寄贈分、その他）
- ・ケニア、タンザニアに関する現地情勢資料
（治安、病気、食糧事情、主要機関連絡先等含む）
- ・JACC（日本アドベンチャーサイクリストクラブ）情報紙
- ・自転車Rナイロビ～ナロモル間幕場調査報告
（道祖神、三輪さんによる）
- ・海外合宿調査報告書（長友）及び写真
- ・ケニア山、キリマンジャロ山登山ガイド集、写真集
- ・「アフリカ — 赤道編」 船尾 修著（山と溪谷社）
- ・ニュースステーション特集「ケニア山」「キリマンジャロ山」VTR

新人宮城のアフリカ合宿不参加について

昨年7月より膝に障害を抱えこれまで夏合宿不参加、秋合宿途中帰京、冬合宿不参加と六月合宿(例年の鍊成)以降は合宿を充分にこなすことが出来なかった。

彼の膝は両膝蓋骨並脱臼症候群と膝蓋靱帯炎(ジャンパー膝)であり先天的な彼の膝の構造に我が部のトレーニングが作用した結果、膝を故障したというものである。

膝の故障が発覚した時よりアフリカ合宿に焦点を絞、り膝の治療に専念してきたが、アフリカ合宿までの復回は見込めないということで1月9日、宮城のアフリカ合宿の不参加を決定した。以下、その判断の理由を記す。

・冬合宿自転車Rを終えて

冬合宿では100 km以上を三日続けてこいだが、体力的にまずきつい。また膝への負担も故障者にとては非常に大きいということが実際に分かった。アフリカでは三日続けて100 km以上走ることはないが、トレーニングが不十分で有り膝に故障を抱えていては完走の可能性は低い、トレーニングが不十分で有り膝に故障を抱えていては完走の可能性は低い。

・日常生活でも支障をきたしている

現在の宮城の膝は普段の生活(歩行、階段の上り下り等)でも痛みを伴い、まして山が登れる状態ではない。自転車もこげない。

・仮に参加させ、現地で別行動をさせる場合の隊への影響

隊を離れ別行動した場合に事故、事件に巻き込まれる可能性が高くなる。

また伴走車に乗りずっと本隊に同行するようなことになっても宮城自身は充足感、楽しみは得られない。

・将来の活動について

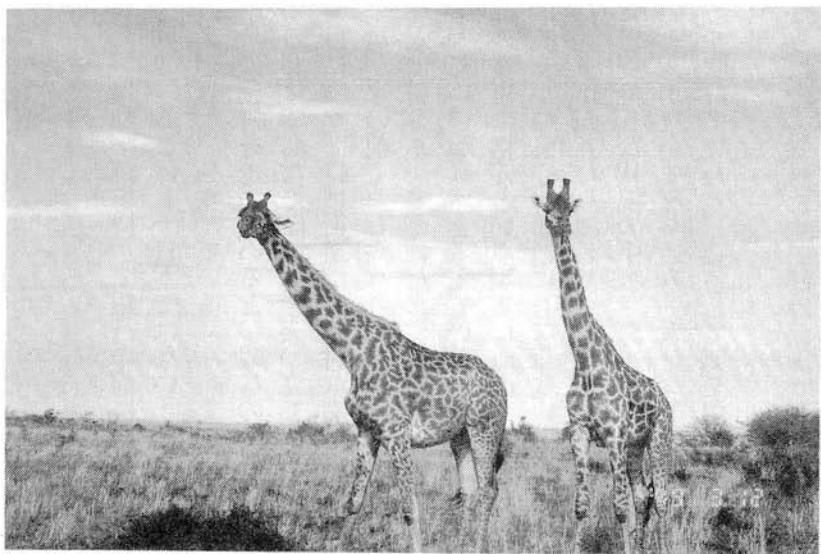
将来の我部にとって貴重な人材である。早く膝を治し、部の活動に復帰することが望まれる。また本人もそれを望んでいる。今まで完治しない段階で無理をさせたりした為、ここまで回復を遅らせていることもある。ここは完治に向けて専念させるべきであり、早く部の活動に復帰できる状況を用意すべきである。

以上の理由により宮城のアフリカ合宿不参加を決定する。

感

想

文



アフリカ合宿感想文

栃谷 佳宏

日本に帰国してまだ一週間もたっていないのに、アフリカで過ごした1ヶ月が、遠い昔か夢の世界の体験だったような気がする。細かい出来事が思い出せず日記をめぐってやっと「ああ、こんなこともあったな」と思い出している始末だ。向こうでの体験と、日本に帰ってからの日常のギャップがそれだけ大きかったということだろう。

当たり前だが現地の人との会話はすべて英語である。飛行機の中のアナウンスから挨拶、ジョーク、果ては入山前の説明まで全て英語。相手がゆっくり話してくればまだ分かるが、ちょっと早口の英語でマシンガンの如くたまたみかけられるともうお手上げであった。だから私にとって土産物屋との値段交渉なんかはまさにエキサイティングだった。

市街地（特にナイロビ）では、いつ爆弾テロや銃撃戦に巻き込まれるんじゃないかと心配で、緊張で

ガチガチだった。自動小銃を持って銀行の前にたたずむ警備員を見て「ここはもう日本ではない」とかなりリアルに実感したのを覚えている。

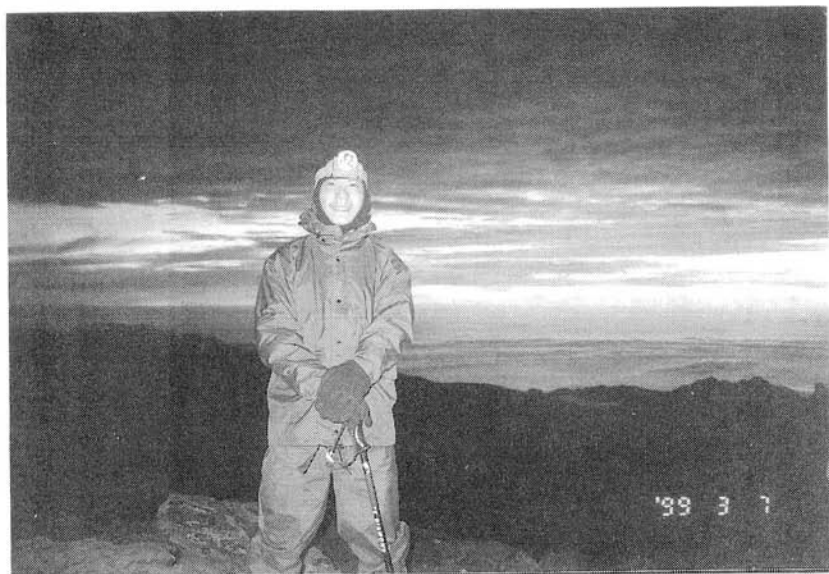
自転車で田舎の農村を走っていると、暇なのか昼間から何をやるわけでもなくぼーっと突っ立っている人がやたらと目につく。特に街道沿いの村なんかだと、村中の全員が家の前でおしゃべりしている（子供や気さくな人は手をふってくれた）。「あのような生き方もあっていいかな」と考えていた矢先、都市部と農村部の貧富の格差という現実にも直面した。スラム街ではモラルや良心が問題にもならないようなレベルの貧困を目の当たりにした。

そんな日常と隔絶した状況の中で、調子に乗って浮かれたり、ミスが続いて落ち込み一人テントの裏でハーモニカを吹いていたたり、猛省して気を引き締め立ち直ったり・・・。

とにかく僕なりに全力で当たって碎けた一ヶ月であ

った。少なくともホームシックにかかっている暇がなかったことは自信を持って言える。ありがちな表現だが、まさにお金では買えない貴重な体験をさせてもらった。確かに僕もこんな合宿を作りたいと思わせる合宿であった。未熟な僕をアフリカまで連れていってくれた先輩方に改めて感謝したい。

この勢いで一気に新人勧誘に突入し、傾きかけた部を盛り上げていきたい。



これからの海外合宿

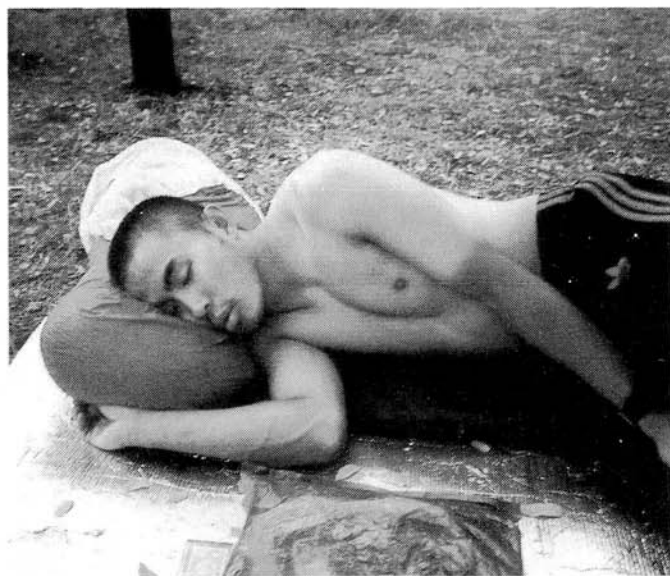
中島 一彦

アフリカ合宿が終わった。先輩達の最大の目標がこの海外合宿だった。この海外合宿の間ずっと感じていたことだが、やはり、やりたい事ははっきりしている活動はいい。最上級生がやりたい事をやりたいようにやる事は早稲田ワンゲルにおいて最高の方法だと思う。合宿を造る者が楽しくやるのが、その合宿を成功させる最低条件なのだ。代を執る者がやりたい事をやる。これが早稲田ワンゲルの魅力だと思う。

しかし、ただ自分勝手にやることとは違う。しっかりと下級生にリーダー層の意志を伝え、コミュニケーションをとる。そして絶対に楽しませるという自信を持つ。これが全て揃った時、全員が楽しめる合宿が成立する。この海外合宿は二年間あたたためただけあって、この条件が全て揃ったいい合宿だった。そしていい勉強になった。

海外合宿は今まで、4年に一度という流れが出来ていくようだが、世界が身近になった今なら、やる気さえあれば現役中に二回行うことも可能なのではないか。51代では無理だとしても、52代では大いに可能であると思う。

栃谷、宮城は是非、海外を視野に入れて今後活動して欲しい。そう思うぐらい海外での活動はインパクトのあるものだった。



暑さで萎えた中島

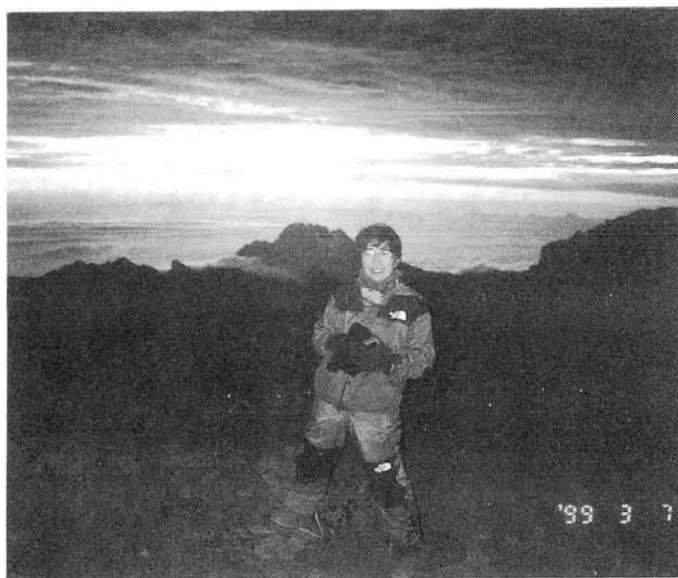
難産転じて

浅井 瑞穂

長い期間かけて立てた計画だけあって、非常によい合宿になって良かったです。予想以上に得るものは多く、予想以上にアフリカは素晴らしい地でした。良きも悪きもアフリカという感じの存在感が私はとも気に入りました。特にアフリカの文化、風土、習慣などから感じることは多く、自分にたくさんのかを問いかけながら活動しました。体調が悪く「運動している場合？」と自分の体に不安を抱き、合宿前は参加を迷うぐらいの状態でした。結果的に回りに迷惑を掛けてしまった部分もあったけど、山に登ることや自転車をごくこと以外に、刺激を受けることや、感動することが多くて、私にとってはそういう部分でも実りの多い合宿でした。

計画段階が非常に長く、常にアフリカに対するモチベーションを高く持つことが難しく、途中で諦めかけたこともありました。今思い返すと難産だった合宿だと思うのですが、それだけに今こうして無事に終わった事を喜ぶ気持ちと、計画段階から見えた時、ワンゲルというものをもう少し違った視点から見れていれば、また一味違う合宿になったんじゃないかな？などと、

自分自身のワンゲルに対する解釈の反省など今考えたりしています。これを、次回の合宿に生かしていこうと思います。



とにかく楽しい

藤田 亮助

アフリカでは本当に自分のやりたかったことができ
た。それだけで満足であるが、今後、我部が海外へ出
ることにについて、いくつか書き留めておこうと思う。

山に関しては、何だかんだ言っても主導権は握られ
ていた。特定の誰かというわけではなく、程度の問題
ではあるが、国内での登山のように、完全に自分た
ちで全てを決めることができなかった。しかしこれは、
現役の海外登山の経験がないことを考えれば仕方な
いことだった。何しろノウハウが伝わっていないので
あるから。先の海外合宿の海外登山における生きたノ
ウハウを、現役に伝える努力が必要だと感じた。

一番いいのは、近いうちにもう一度海外合宿ができ
ることだと思う。人間どんなに頑張っても記憶はいっ
の間にか曖昧になってしまう。助言できるうちに海外
に出て欲しい。

海外で活動を行うことについては今後とも批判的な意
見が出ると思うが、行った者としては「とにかく楽し
い」ので是非行ってもらいたいと思う。



合宿をふり返って

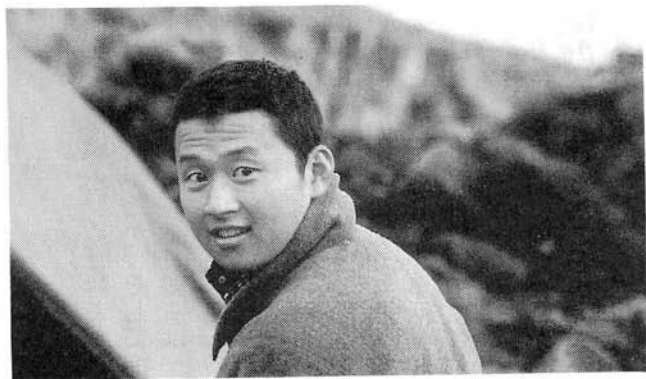
徐 宗聖

ワンゲルの合宿というと、頭も大切だが最後は体力勝負というイメージがあるが、今回のアフリカ合宿は、全面的に頭で勝負という合宿だったのではと思う。

海外、それも日本から最も遠い（地理面、意識面ともに）アフリカという地を合宿地に選んだ上で、安全面という一番大切な観点から見ると当然のことだが、何せ初めてだったので混乱したのはしょうがないだろう。行動的には合宿でなく、旅行といった感じであったのはしょうがない。さらに英語が話せず、現地の人々とコミュニケーションするのが難しいとなれば増々「はく・・・」となるのはしょうがない。

計画段階では、細かいことまで話を煮詰めることの重要性を学び、合宿中では、日本にいる私の「井の中の蛙」をまざまざと見せつけられ、当然のことながら人とコミュニケーションする道具としての言葉（今回に限れば英語）の重要性を学んだ。言葉というのは大切だ。人に自分の気持ちを伝えるのに一番大切な道具だ。これまで「なんでー英語なんてよー」と思っていたが、「そんなことはないの違うのダメな子ね、まったくもー」と思わず自分をたしなめたくなくなる。それだけで

はなく、本当に死ぬまでに五大陸最高峰登頂を目指している私にとって、キリマンジャロ山のピークに立ってなかったことも合宿後の課題となった。非常に残念だ。こんな風によく書くと、全く合宿を楽しめなかった様な感、そんな事はなく、以上にあげた以外には何も後悔のない合宿だった。楽しくて楽しくて、一ヶ月なんかあつという間に過ぎてしまった。海外旅行バージンの私には、何もかもが新鮮で本当にワンゲルは色々なことを（やる気になれば）やれる場なのだなどしみじみ感じた。血がアドレナリンが体中をまわり過ぎた。そんな一ヶ月だった。



アフリカ合宿

長友 慎治

51代中島たちに代交替し、やっとこれまでの怒濤の二年間を落ちついてふり返ることができるようになった。中でもアフリカ合宿においては、直後に新勤活動の準備や報告書作成等に追われ、それらを全て終えた今だから、あらためて客観的に考えられる。

まず、はじめに言っておきたいことは、二年で代を執った私たちにとってアフリカ合宿は、なくてはならない羅針盤のような存在であったということである。

代替わりした当時の4人には、これからのワンゲルに対する明確なビジョンもなく、同時に個人のワンゲル感も確固たるものとして確立なされていなかった。49代年間方針を決める際にはとりあえず過去の代の年間方針を真似てみたものの、しょせん真似事は真似事では自分たちの主張がそこにはなかった。代を執るからにはやりたいことをはっきりさせたい。しかし、具体的に出てこない。これには正直焦った。これまでの一年半早稲田ワンゲルとして活動してきた間、何も考えてこなかった自分に気づいた。

しかし、海外合宿をやりたいという気持ちは持って

いた。ただ単に海外合宿をやりたいというだけで具体的な地域などはまったくの白紙であったが。そして海研が始まった。海外には行きたい。でも部の実情はどうか。どこまでのレベルを見越しているのか。何人の部員で行くことになるのか、全く先行き分からない時期での決定であった。

アフリカに決めた私の理由は、①地平線という大陸に憧れた②アフリカという自分の中の未知な世界に興味を持った③野性の動物を身近に感じながら活動してみたい④キリマンジャロという世界有数の山に登れる、ということからであった。

そして何よりもアフリカ合宿を目標に掲げた時から、自分たちの進みたい方向がはっきりしたことが大きかった。それからは、アフリカ合宿まっしぐらで毎日の準備に追われた。とても充実していた。

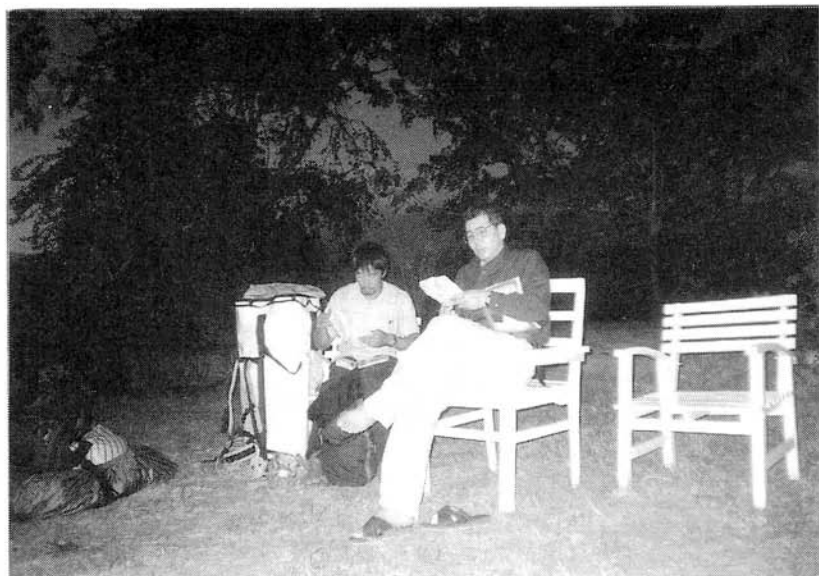
そしてアフリカ合宿を終えた。では私たちには何が残ったのか。アフリカ合宿を終える前と後ではっきりとその差があった。自信であった。私たちはずっと自分たちに自信を持ってなかった。二年で代を執った時か

ら実力不足をずっと言われてきたからだ。いつしかそれは、「自分たちにはいつまで経っても実力はない」という暗示に変わっていた。だが、この合宿を成功させたことがその暗示を解いた。事故なく、事前の準備・調査段階からスムーズに事を進めてみせた。これで実力がないとは言わせない。

結局アフリカ合宿は、本当に自分たちのためだけの合宿だったのだと思う。部の歴史から見れば、アフリカでキリマンジャロ、ケニア山に登り、自転車で両山を繋いだ活動は、さほど意味を持たないかもしれない。しかし、私たちには大きな結果として残った。その自信が新勤活動で始まり夏合宿で終わった50代下半期に現れた。49代からの苦悩がついに春を迎えたのが50代下半期であった。そんな気持ちを今持っている。

(平成11年 11月5日 記)





左から中村隊長、佐藤監督



大地溝帯を観光

関係者及び協力

していただいた方々の紹介

関係及び協力していただいた方々 (敬省略)

「在日本」

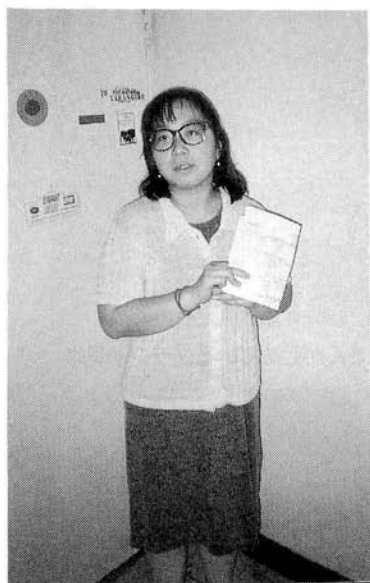
- 築地 俊行 (株式会社道祖神)
坂本 彰子 (明治薬科大学山岳部OG; 葉の提供、高所医療
についてのアドバイス)
岩水 龍峰 (岐阜女子大学ワンダーフォーゲル部顧問; 資料
提供、寄付)
蛭田 弥希 (早稲田大学山岳部主将; 寄付)
デザインハウス・コマ株式会社 (寄付)

●早稲田大学ワンダーフォーゲル部OB

- 1代 安田 平八 (寄付)
10代 内田 直彦 (寄付)
15代 土屋 正忠 (寄付)
19代 左近充輝一 (フィルム100本提供、現像引受)
23代 市川 泰夫 (寄付)
27代 三廻部秀男 (寄付)
29代 新井 規夫 (寄付)
31代 鈴木良太郎 (寄付)
33代 庄 和也 (リバーサルフィルム20本提供)
稲門ワンダーフォーゲル会 (隊長派遣、その他計画全般における
バックアップ)

「在アフリカ」

- 仲又 康友 (大阪セメント; ケニア在住)
三輪 美枝 (株式会社道祖神)
安東 建 (朝日新聞ナイロビ支局長)
中野 智明 (フォトジャーナリスト)



道祖神の三輪さん



お世話になった仲又さん（左から二人目）



ヤギを食べさせてくれたカヒンディさん



ガイドのデービットさんと浅井



仲又さんが勤めているプラント見学



ハニーバーガーロッジのママさんと



スタッフの皆さんとお別れ

編集後記

今回の報告書が完成することで、我々50代のアフリカ合宿を完了することができました。現役でこの合宿に参加した人間は、50代委員を抜かすと2人しかいないという合宿でしたので、後代にアフリカ合宿を伝えるとなると、この報告書が頼りになってしまいます。

今回のアフリカ合宿が意味することの一つに、「世界の近距離化」が言えます。今や我部の中でさえ地球の裏側まで飛んで行けるようになりました。

日本の山岳から若者の姿は遠ざかっていますが、世界を彷徨する若者の数は年々増えていると言います。我々ワンダーフォーゲル活動を行う側の人間からすると若者の山離れは残念に思われますが、世間の流れは認めざるを得ません。

そのような中でこれからワンダーフォーゲル活動を行っていくには、敢えて世上に逆行するに相応しいまでの魅力の確認、確立が大切になってきます。現役がその姿勢を忘れずに自分たちの行っている活動に自信を持つことを願わずにはいられません。

我々50代が平成11年9月に交代し、11月20日の50周年記念行事に間に合わせるべく、報告書作成を進めました。

「彷徨」との同時進行にも関わらず、約一ヶ月の短い期間で仕上げる事ができましたのも、印刷を引き受けていただきました13代舟木OBをはじめとする株式会社秀和スタッフの方々のおかげです。この場をお借りして、あらためてお礼申し上げます。ありがとうございます。

アフリカ合宿報告書

平成11年11月11日印刷

平成11年11月15日発行

発行者 早稲田大学体育局

ワンダーフォーゲル部

編集責任者 長友 慎 治

印刷所 株式会社 秀和

東京都新宿区高田馬場1-16-15

☎ 03-3205-1315

発行所 早稲田大学体育局

ワンダーフォーゲル部

東京都新宿区西早稲田1-6-1

☎ 03-3203-4479

部室直通

☎ 03-3207-1937

